氷結の機兵と
亡国の皇女

空が紅い。
雲一つなくどこまでも続く漆黒の空が、帝都の直上だけ。
帝都を閉ざす一五メートルの城壁の内で、人が熔けて建築物が爛れていく。
どこからか吹き荒れる竜巻が、塵の粉を連れ去り、拡散する。
帝都を象徴する大聖堂が、城前の大通りが、焼け焦げて砕け散った。
中央に鎮座する帝城からは、そのすべてが見えました。
民衆の断末魔。駆け回る兵達の叫び。魔導士たちの尽力が。
そして侍女の悲鳴も。見知った顔の声の指す方へ、目を向けると。

太陽が、降ってきている。

そう直感しました。全身の毛が逆立つほどの悪寒に襲われ、それに目が釘付けになって動けない。

太陽は、帝城の角の尖塔を抉り、中庭に侵入してきた。
尖塔が崩壊し、残骸が太陽に落ちる。
太陽のすべてが崩落の下敷きになった。
それでも燃え盛る巨大な右腕が、中から覗いてくる。
瓦礫が、爆散する。現実に追いつけず、その場にいたすべてが唯呆然と太陽の一連の動きを見ていた。
弾け飛んだ破片が侍女の一人を潰す。鮮血が、私たちの時間を動かし始めました。
ただ悲鳴を上げて逃げ惑う侍女や執事たちへ向け、左腕もまた瓦礫を吹き飛ばし、太陽は上体を起こしました。
燃え盛る炎に包まれて瓦礫は融けだし、熱波を周囲に撒き散らす。帝城の中にいる私ですら身を竦ませるほどの熱風。
中庭は忽ちに、焦土と化しました。憩いの場であった芝生や噴水は炎を上げ、人だったものが転がり融ける。

近くのガラスが全て割れ、帝城が揺らされているようです。
「姫様、こちらへ」
手を引かれる。呆気に取られ、何の感情も抱かぬまま連れていかれる。
手を引くのは機士服を着て、最近私の護衛機士になったばかりの青年。黄土色の髪の奥に見える瞳はつり目で、険しい表情を浮かべています。
「ど、どこへいくのですか」
「陛下のもとへ」
「ですが、この状況では……」
「最悪ジンで帝都を脱出します」
「みなを置いてですか」
「陛下や皇族の皆様、民たちは他の者共がなんとかしましょう。私個人が、今最も優先すべきは姫様の御身です」
今為すべきことを既に定めた瞳で応えられ、口籠る。

彼は孤児院の出自だと聞きました。本当はそちらのほうも気がかりな筈。
それでも職務を優先し、今も動いている。私の歩幅などお構いなしで進む彼の背中は、焦燥感に駆られているように見えた。
足をもたつかせながらも彼を追う私の記憶は、そこで何の脈絡もなく、途絶えました。

風に揺れるヤシの木、心地のいい波のさざめき。太陽に向かって顔を上げ続けるひまわり、大きな家を背負ったヤドカリ。

燃えるように熱い砂浜に降り立ち、高く聳える構造物とそのバックに見える入道雲を見上げつつ、大きく伸びをする。

ずっと座っていた為か、肩や腰が音を上げてそれを歓迎した。

「伊吹。今日も助かったよ」

「ああ、それは……」

伊吹と呼ばれた黒髪の青年は、話しかけてきた赤髪のチームメイトにそう返し、後ろを振り返る。

そこに鎮座するのは、この環境にて異質の存在感を放つ蒼い人型の物体。

広い砂浜に、片膝を地につけた状態でも見上げるほどに大きなそれは、鋭利な形状をしている。

二の腕の倍ほどの長さを持つ腕部、大きなスラスターが二つ並んで剥き出しの脛。腰は上半身を支えられるのか疑問に思うほど細い。

コックピットは胸部の中心にあり、無人の座席を晒している。

特筆すべき点としてはスラスターが九つ背部や臀部、脚部などに所狭しと備えられていることか。

それとも、スラスターとは別に、板で栓をされているスラスターの形状をした部分が、胸部や肩部、肘膝踝の関節部に十箇所あることだろうか。

「こいつのおかげだな」

流線型と称するのが適切な、頭部を見上げる。アイカメラは細く長いものが、左右と上に三つ。上のアイカメラの延長線上の後部には、アンテナのような機関がそそりたっていた。

「何度見てもデカいし、カッコいいよなあ。俺も機械機兵の役職目指そうかな」

「応援するが、大変だぞ」

「だよな、カンスト役職六つだっけ？」
「いや七つだ。剣豪と格闘家、射手と魔術師、工兵と錬金術師、それと合成術師だな」
「前三つはともかく後ろ四つは絶対無理だわ」
「応援するって」
「応援されても無理」
談笑しつつクランのコテージに入り、自分の部屋に戻る。
装備の点検や新しく買うべきパーツの確認。ゲームとは思えないほど様々なことができる。
「そろそろ飯かな。リアルのほうで呼ばれそう」
伊吹はそう呟くと、光となって消えた。

フルダイブ型ＲＰＧ、【ガイアアース】。
六年前、米軍から米ゲーム会社を経由し、日本のゲーム業界に伝わった、脳とイ

ンターネットをつなげるフルダイブ技術。
それを用いて大々的に告知、開発されたタイトルだ。専用の機器とともに発売された【ガイアアース】は、各組一つまでなのにも関わらず、販売日当日に生産していた分は完売。
企業の持てるすべての工場をフル稼働させても生産が追い付かず、予約しても届くのは十ヵ月後という状況を生み出した。
ゲーム内容が画期的ということも、それに拍車をかけた。
ＲＰＧらしく剣士や魔導士といった戦闘職からそれを支える生産職、ゲーム内でゲームを作ってしまおうという動きから始まった専門職など、多様すぎたのだ。
果てにはゲーム内宇宙を目指す者や、戦闘機を造りそれに乗るパイロットまでもが生まれ話題になった。
フルダイブということで、自分が別の世界で新たな人生を歩んでいる感覚をだれもが共有しているのだ。

そして発売から四年がたった現在でも【ガイアアース】の進化する速度は衰えることがない。むしろ加速しているかもしれない。
魔法という未知の分野があることで、現代地球には存在しないロボットなども作られるようになり、猛威を振るっているのだ。

昼食の炒飯をかきこみ、早々に帰ってきた伊吹は先ほど確認したパーツを購入しに行こうと部屋を出る。
小さな常夏の島を専用の拠点として構える伊吹たちは、いちいち町のある大陸まで出掛けなくてはいけない。
プレイヤー同士のＰＶＰがあるゲームのため、利便性よりも防衛面を重視しているのだ。
砂浜近くのコンテナに、自動で格納されていた蒼い愛機に乗り込む。跪いた姿勢でも見上げるほどの大きさのそれは、立たせると十七メートルの体長を持つ。

機体名『K四―〇　エッケガルニ』。伊吹の四代目の愛機。
コンテナが起き上がり、エッケガルニを繋ぎ留めていたロックが外される。
重力に引かれ、巨体が二本の足で大地に立った。
憧れたアニメのような、だれかとの掛け合いもなにかの合図もない。それでも、機械機兵に乗っていて一番気分が高揚する瞬間だ。
「出る」
ただそれだけ呟いてエンジンに点火する。
背部と脚部のスラスターで半ば強引に浮上した。
上から押されるようなGを受けながらエッケガルニは、ロケットの如く直線的に超高空まで浮き上がり、滑空するように大陸のほうへと飛んでいく。
自分のパーツだけでなく、クランメンバーに必要なものがないか聞いてこればよかったな、と思いつつ戦闘機並みのGにさらされること三十分。
大陸の端が見えてきた。島とは違い、きれいな砂浜はなく、岩場が多い。その先

には森が広がり、人の気配はない。
大陸の片隅のだれも寄り付かない辺鄙な森。上空からほぼ毎日見ているが、代わり映えのしない景色。
そこに今日は見知らぬものを感じた。
大きな木々の間。不自然に開けた土地に黒い何かが存在している。
好奇心が沸いて、降下しつつ正体を探る。
黒い何かは渦巻き、中心に向かってさらに黒い物が集まっていく。
その様子に、一つだけ心当たりがあった。
「これが噂にきく転移ポータルか？」
ゲーム内にランダムで生成される転移ポータル。
その出現率は極めて低く、公式が言うには「ひと月に一時間、世界のどこかに開く」とのこと。
そのため目撃例は極端に少なく、人の目に留まるのは年に一度か二度。

中に入ってみると浮遊大陸について其処の主になった、最高レアリティの装備がポンポン出るダンジョンに転移した、など公式が認めていなければだれも信じないような事象を呼ぶ存在だ。

「危険な事例は聞かないし、入ってみるか」

買い出しに行くつもりだったが急ぎではないし、宝の山が待っているだろうチャンスを逃す手はない。

スラスターの出力を調整し、転移ポータルの前に降り立つ。

十七メートルを超えるエッケガルニよりも一回り大きい黒渦。

周辺の空気を吸い込んでいるわけではないらしく、一メートルも進めば触れられる距離にいても機体が軋んだり風に揺れたりはせず、感じるものはなかった。

一応何があっても即応できるように燃料のチャージをし、武器弾薬も持てるものは持っている。

午前の戦闘の時に受けたダメージが装甲に残っているが、微々たる損傷だし、直

す手段はない。

「雪」

今から未知の場所に行くのだから即応能力は欠かせない。ストレージからエッケガルニ用に開発した刀を取り出した。

【斬刀　雪】

形状は日本刀を強く意識している。装飾は最低限で、鍔すらも多少の出っ張りがあるだけ。

腕の長さが二の腕の倍あるエッケガルニが扱っても支障がないように長く、全てを断てるように鋭く、仕留めきれるように重い。

長さ十六メートル弱の大太刀だ。

「今日も頼むよ」

雪の握り心地を確かめ、戦闘前に必ず言う言葉をつぶやく。

言うだけで、切れ味が上がる気がするのだ。

「行くか」

エッケガルニの雪を握っていない腕が黒渦の中心に触れる。

瞬間、伊吹の視界は暗転した。

何度も雨が降り、小動物の雨宿り場所になり、足元に小さな生命が宿った。苔や若木の芽が顔を出してエッケガルニに絡みついている。

最初、ここに来た時は花々が咲き誇り、体に当たる太陽の光は優しいものだった。この地で目を覚まし、一歩も動かずただ一点だけを見つめて、季節が流れた。

花々が咲き誇る春、動物が涼みに来る夏。周囲が赤く染まり蒼が目立つ秋、動植物の気配が感じられない冬。

今は、二度目の冬の季節だ。

五日前から雪がほぼ横殴りに打ち付けてくる豪雪が続いている。跪いた姿勢の自身の体に、雪が積もり崩れ落ち、また積もっていく。

そうして体の下に空洞を作りつつ、エッケガルニの姿が雪に埋れる。

転移ポータルに触れて、目を覚ましてからずっとこうだった。

体は微動だにせず、ゲームからログアウトすることもできず、救いを待つことし

かできないまま、二年が経とうとしている。
エッケガルニの体と融合した伊吹の意思は、生きていた。
エッケガルニの動かない視界に縛られたまま、生きている。
死ぬこともできない孤独の恐怖を抱えて、生き続けている。
その精神は壊れ始め、リアルだと思っていた世界こそ空想だったのではないかと錯覚し始めてもまだ、生き続けている。
自身の行動を何度悔やんでもやり直しがきくわけもなく、ただそこに意識があるだけだった。
例えるなら、意識のある植物状態というのが分かりやすいだろうか。
いつどのような形で終われるかもわからない、地獄のような拷問のような時間が続く。
寒さも感じぬ体では、雪に埋れても死ぬことすらも叶わない。
いっそ、ここに悪魔か死神でも来てはくれないだろうか。

あそこにいる銀髪の少女のような容姿で来てくれたら嬉しい。
セミロングの長い銀髪と、透明感のある蒼眼。髪のもみあげは左右非対称で左が長い。小柄かつ、まともに肉を食っているのか疑うような細い体躯で、手の指先は赤く霜焼けている。
とうとう幻覚まで見え出した。やたらと芸の細かいものだ。
フラフラと歩いて近づいて、下に入り込んでくる。
エッケガルニの下にできた空洞で、寒さや風をしのいでいるようだ。こんなに豪雪が降っている季節とは思えない薄手のドレスと、申し訳程度の長袖カーディガンを着ている。
体は小刻みに震え、藍色の瞳が揺れる。そのまま凍死してしまいそうなほど肌が白い。
暖を取ろうともせず、そもそも薪も種火も持っていない。
まるで自分の現状を映したようだ。

風前の灯と表現するのが相応しい。死を待つだけの弱々しい姿だ。
少女はすぐに迎えが来そうで、俺はいつまでも来なそうだという違いがあるが。

震える少女を見つめる。
本当に幻覚だろうか。
地面にしゃがみ込み、息遣いは荒い。蒼い瞳には涙がたまり、小さく苦々しい表情を浮かべて、こぶしを強く握っている。
幻覚ならここまで表情が、行動が移り変わるだろうか。こんなに人間らしく動くだろうか。
もし、この子が実際に生きていて、苦しんでいるなら。
『何っ!?』
聞き覚えのない言語。驚きへと表情が変わり、見上げる少女。
……この二年弱、何もしてこなかったわけではない。手足が動かせないか、握っ

ていた雪をストレージに仕舞えるか。ログアウトできないか。
そのほとんどは全くできなかった。一つを除いてすべて、といったほうがいいだろうか。

コックピットハッチを解放する。
唯一自分の意思でおこせる行動はこれだけ。
それでも、今の少女を守るくらいのことはできる。
『ジン、の操縦席？』
少女が入ってくれるかは別だ。
風を避けるつもりで入った場所に、急にこんなものが出てきたら警戒するだろう。
そもそもコックピットだと認識してくれているだろうか。女の子はそういった類に疎い印象がある。
少女は、あまり警戒もしていないのか、驚きつつも近寄ってきた。

そしてそのままコックピットを覗き込んだ。
懐かしい牛皮の黒いシートに一対の操縦桿。所狭しと並ぶ、八割が雰囲気創りの計器に足元に並ぶ六種類のペダル。
さっきはよく見えなかった少女の顔がよく見えた。瞳は大きく口が小さい端整な顔立ちだ。美しいというより可愛い、幼い印象を受ける。泣いていたのか目元は赤く腫れているがその素肌は雪よりも白いように感じた。
少女は中を見渡しながら、ゆっくりとシートに腰掛けた。
それを確認してハッチを閉じる。これで寒さは凌げるはずだ。
勝手にしまったそれに肩を浮かせてまた驚いているが、シートの上部後方からコックピット内を見ている現在、顔は確認できない。
暖房機能は機体の起動さえできればつけてあげられるのだが。

そこで一つ疑問を抱いた。

なぜこの視点で見ているのだろうか。
いつの間にか、この少女を追ってコックピットに視点が移動していた。
その理由を解明するより先に、思わず「メニュー」と脳内で呟く。
『きゃっ』
少女の目の前に画面が浮き上がった。
【ステータス
役職変更
衣装変更
ストレージ
機兵召喚
テレポート（機兵）
グラフィック設定
音量設定

オプション設定。
データアップデート
ログアウト　　】
いくつか黒線で消されているものの、二年前に見た記憶のままの姿だ。その多くが黒線で消されていることを除けば。
ログアウトも例に漏れず黒線で消されている。何度選択してみても反応はない。
心のどこかで予想はしていた。
ここはゲーム内ではなく現実なのではないかと。
そしておそらく地球でもないだろう。
画面操作をしている間に、困惑した様子の少女があれこれと独り言をつぶやいていたが言葉一つ、単語一つも何をいっているのかさっぱりわからないのだ。
地球の言語でも全て判るわけではないが、白い髪と肌の少女が居そうな北欧やカナダ、ロシア辺りの言語ではないのは判る。

『ジンって起動するときの画面こんなにわからない言語ばかりが並ぶのですか……？
ああ、エステリッヅァが動かしているところを見ておけばよかった……』
あの転移ポータルはどこか違う世界に繋がっていた、いわゆる異世界転移というものなのだろう。
この少女が来るまでは現実かどうかすら疑っていた。
自分も人間の体ではなくなった。
今更そう言われたところで、驚いはすれど喜びも悲しみもない。
二年前、地球にいた俺に伝えれば喜び、目を輝かせていただろうが。
……ステータスは？
【機体名　K四―〇　エッケガルニ
所有者　未設定　】
こちらは様変わりしている。
『また変わった……』

元々は二十以上の項目が並んでいたはずだが、二つしかない。
そして俺自身の名前がなく、機体名と所有者の欄しかないということはやはり、この機体と完全に一体化していることの証明だ。
『上の欄は埋まってるけど、下は何も書かれてない？　……この画面から動かなくなったのですが、どうすれば？』
一体化しても動けなければ意味はない。どうにか動けないだろうか。
ストレージはアイテムが収められているだけだし、機兵召喚やテレポートは自分の所に機兵を呼び出したり機兵の所に飛んだりするだけ。
問題の解決はできそうにない。
『えっと、私待ちですか？　ええ？　触ったらいいの？』
ふと、視界の中でずっと独り言を言っていた少女の手が動いた。
その動作は戸惑いつつも明確にステータス画面に伸びていく。
その手が触れた瞬間、体に電撃が走るような感覚とともに直感した。

動ける。

【機体名　K四―〇　エッケガルニ
所有者　ÅйеЪД・ƒƒцД・ДƒƒйЁ∞（ЪÅж∴】

表示されていたステータス画面には、空欄に見慣れない文字が。文字化けなのか
この世界の言語を流用しているのか。

そんなことはどうでもいい。

今なら、この子が乗っているなら、俺は動ける。

千載一遇の機会に期待が高まっていく。

「システム起動、機体各位チェック、燃料残量チェック」

無意識に起動シーケンスを口ずさむ。

そしてエッケガルニは俺の声に呼応して起動の準備を始めていく。

宙に浮いていた画面が消え、コックピット内のスクリーンが頭部のアイカメラとリンクする。
操縦桿のロックが外され、自動で手指が動かせるか試していく。
機体各所に配置されたエンジンが熱くなり、スラスターの噴射を待てない排煙が板で栓をした箇所から溢れている。
二年ぶりに動き出す力を取り戻した機体は、喜びを表すように四肢を少しずつ振動させて、その準備を終えた。
「チェック完了、システムオールグリーン」
二年雨ざらしで整備も何もできていないのに、問題なく動ける。
異世界に来た故か、ゲームの中の機体だったからか。なんにせよ有難い限りだ。
「K四―〇　エッケガルニ、出撃する」
今まで言ったことのない、号令を口ずさむ。
そして、待ってましたと言わんばかりにエッケガルニの三つの眼光が、朱く揺ら

めいた。
立てていた右足に力が入り、左足が浮く。十を超えるスラスターから少しずつ噴射し、姿勢制御を試みる。雪が積もり、埋もれて見えなくなっていた両手が雪を振い落とす。
左手に握られた大太刀が姿を現した。エッケガルニが完全に立ち上がってもなお、切っ先は雪に埋もれている。
こちらもまた切れ味を保っていそうだ。豪雪の合間に煌めく刀身が物語っている。

少しずつ前傾姿勢に移る。
重力に従って上半身の落ちる速度が速くなった時、右足を前へ。
右足に力を込めて伸ばせば、左足を。
二度三度繰り返せば上半身を起こして、最高速へ。
木々の間をすり抜け、巨木を飛び越え、前方へひた走る。

楽しい。ただ動けることがこんなにも素晴らしいものだったなんて。
一時的でも当たり前が当たり前でなくなったからこそ、感じるものがある。
少し開けた草原で、左足を起点に一回転。
遠心力に合わせて左手を振るう。
大太刀の雪が風を斬る。
遠心力はそのままに背面で右手も柄に添え、大きく振りかぶった状態へ。
そして何もない草原へ、雪を振り下ろした。
大きな衝撃を生んだその一撃は周囲に積もっていた雪を吹き飛ばし、一時的に何もない地表をさらした。
変わっていない。ゲームの中で動かしていたエッケガルニと遜色ない威力だ。
一連の動きを終えて、人心地つく。
久しぶりに動くことができた感傷に浸りたい。自然と口角が上がる気がする。
『痛っ……』

コックピットに少女を入れていたことを忘れてた。
そちらに意識を向けると、何処にぶつけたのか右肩をさすっている少女の頭頂部が見えた。
「謝りたいが、声は聞こえてないだろうしどうしようか」
『もう動かなくなった？　私に動かしてみろってこと……？』
何か言っている。やはり怒っていそうだ。
ここでこの少女が降りるようなことになれば、俺はまたここで一人誰かが搭乗してくれるのを待つことになる。
それは何としても避けたい。
どうにか謝罪の意思を伝えられないだろうか。
とりあえず、暖房をかけてあげつつ様子を見よう。
『……えっと、どうだったっけ』
少女の手が操縦桿に伸びる。

そしてそれを握ると、エッケガルニを操縦し始めた。
先程、俺が操縦した時も手元足元の操縦桿やペダルは動いていた。
少女はそれを見よう見まねで繰り返しているようだが、中々様になっている。
ゲームでは、勝手に動いて移動したり戦闘したりする時に同じような仕様だったはずだ。
エッケガルニのオートモードを俺が担当している、というのが適切な現状か。
『動いてる。動けてる。……じゃあ、エステリッヅァを助けに行かなきゃ』
確かめるような足取りから、速度が上がり歩幅が広がり、一直線に駆け出す。
少女の家かどこかに、持ち帰られるのだろうか。
降りようとする素振りを見せないだけでかなり安心した。
このまま、誰でもいいから人の目にとどまるところに連れて行ってもらえると、非常に助かる。
何年も森に放置されるようなことにはなりたくない。

少女が左側の操縦桿を立てたり、前に押し進めたり、押し倒したりしている。
そのたびに雪を握る左手が有らぬ方へ伸び縮みを繰り返す。
挙動を確かめているようだが、もう少し丁重に扱ってほしい。
システムに問題がなかったとはいえ、二年も動いていなかったのだからいつ破損してもおかしくはないのだ。
『方角は、こっちで合ってるはず。ジンがいっぱい居たんだもの、少しずれてても見えるはず……！』
周囲は相変わらず雪化粧をしている森だが、豪雪は降っていない場所に移った。
散るように降る雪の合間に、明らかな異音を感知した。
金属同士が擦れ、火花が散るような耳につく音。何かが爆発する轟音。
ゲームで聞きなれたその音に、コックピット内のレーダーに目を向ける。
一キロ先、二時方向。合計八つの反応があった。
もう少しで目視確認できる距離だ。

本来エッケガルニは、半径二キロの距離ならばすぐに探知できる。
しかし、俺自身がこの体で動くことに慣れていないことと、気分が浮いていたせいで発見が遅れた。
雪で視力や聴力も悪かったというのは言い訳か。
「この先で戦闘が起きている。進路を変えないと巻き込まれるぞ」
言葉にしたところで伝わらない。
何とか伝える方法は……。
ゲームでは確か、スクリーンにマップを拡大表示していた。
そう記憶を呼び起こすと、実際にスクリーンに映し出された。頭に思い浮かべることで出来るらしい。
他にも試してみたいが、それどころの状況じゃない。
少女はマップを一瞥しただけで、足を止める気配はない。
戦闘に参加するつもりなのだろうか。

戦場との距離が近づいたことで、反応した対象の姿が視認できた。
スクリーンに表示しつつ、それらを観察する。
『……これって地図？　やっぱりこの先にエステリッヅァが』
八つの反応は、機兵に酷似した兵器だった。
一七メートルを超すエッケガルニと比べるとだいぶ小型だが、一〇メートルはある人型の兵器たち。
見たところ、六対二の構図のようだ。

灰色の重厚感ある六機の機兵。
巨体をしっかり支えるために末広がりに大きな脚部。大木のように太い腕の先は指ではなくそれぞれの武装が取り付けられている。
背部にはスラスターが三つ横並びで取り付けられ、その上には大きな燃料タンク。
頭部は異様に小さく、モノアイカメラが二つとそれを保護するヘルメットが被せ

られているだけ。
武装はバラバラで銃剣と盾を持つ三機と、両腕でガトリングガンを抱えている二機、大楯二つ合わせている一機など多様だ。

それらに相対する二機。中世ヨーロッパの騎士が着込むような西洋甲冑が、大型化したような外見の機兵だ。
スラスターは小さく一つだけ。
二十五メートルほどもある長槍をもつ機体と、両刃の西洋両手剣をもつ機体だ。
飛び武器は持ち合わせていないように見える。

六機の被害は軽微なのに対し、二機は損傷が激しい。
長槍の方は左手の自由が効かないのか力なくぶら下げるだけ。
頭部や脚部には弾丸を打ち込まれた痕があり、電気系統に問題があるのか時折電

流を走らせ、動きが鈍る。
西洋両手剣の方はもはや動かず、胴部から黒煙を上げていた。
そんな状態であるにも関わらず西洋両手剣を地に突き刺し、三点で立ち続けている。
すでに勝敗は決していた。
見えた戦況をそのままスクリーンに映し、少女にも共有する。
『エステリッヅァ！　それにアグニもっ！』
悲痛そうな声色だ。劣勢の二機が少女の味方か。
なら、俺のすることは決まった。

本音は、異世界でまだ何もわかっていない状態で、戦闘に巻き込まれるのは避けたかった。
エッケガルニが、この世界でどこまで通用するか未知数だ。

あの戦闘はどういった経緯で起こっているのかもわからない。
俺を連れ出してくれた少女は、何も関係がないかもしれない。
少なくともそれだけの避ける理由があった。
でも、少女はすでに戦闘の渦中にあるらしい。
あの二機は少女の味方で、それを助けたいという思いが言葉が分からなくても、表情から姿から解る。

なら、俺のすることは決まっている。
『っ？　ジンの制御が？』
雪を握る手に力が籠る。
少女の動かしたぎこちない姿勢から背筋を伸ばし、敵を見据える。
どれだけ戦えるかわからない？
ならば全力で対応するまで。

「技能展開。全て、凍てつけ」
エッケガルニの三ツ目が、赤黒く光る。
それに呼応するように、スラスターとは別の、胸部や肩部、各関節部に散る十の冷却板が口を開ける。
インジェクションポートという名称のそこからは、止めどなく白煙が溢れだした。

特殊技能、氷河期。
多くのプレイヤーがいるゲーム【ガイアアース】に於いて、伊吹に、エッケガルニだけに与えられた技能。
能力は単純、絶対零度の白煙を噴き出し、それに触れた任意(・・)の(・)物質(・・)を氷塊に変換する。
この技能のおかげで、ゲームにおいて負けなしだった。
ひとたび戦場に出れば、味方を巻き込むことなく敵をすべて凍らせることができ

たのだから。
ゲーム内でエッケガルニと対峙するには、レベルマックスの氷結耐性が必須だった。
この世界の機兵は、どうだろうか。
白煙は、急斜面を滑る濁流のごとき速度で戦場へ雪崩れ込んでいく。
エッケガルニ本体も敵と認識した六機のうち、一番近くにいた銃剣を持つ機兵へ駆けだす。
敵は今更こちらに気づいたようだが、知ったことではない。
雪の切っ先を下から上へ斬り上げる。
『うわ――ああっ！――』
左わき腹から右肩にかけて抉られた機兵から断末魔が、接触回線を通じて頭に響く。
どうやら異世界であっても、人間の叫び声は変わらないらしい。

聞こえるようにしていないので、少女にこの断末魔は聞こえていないが、俺自身も聞いていて心地よいものではない。
心証もそうだが、感覚もまた不快だった。
雨の日の片頭痛に近い感覚だ。パイロットは回線を開かないと聞こえないが、機体と同化していると不意打ちで来るため、そこはかとなくもやもやとする。
しかし、収穫もあった。
雪の切れ味は、この世界でも十二分に通用する。
氷河期も、それは同じだ。
白煙に巻き付かれた機兵が二機、人型の氷塊へと姿を変えていた。
全力を出す必要もないほどに、圧倒的な差があった。
未だ十か所のインジェクションポートからは、止めどなく白煙が溢れていく。
この一瞬で周囲一帯に濃霧といえるほどの白煙が広がっている。
『はっ……くちゅ』

コックピットから可愛らしいくしゃみが聞こえた。
……そういえば少女はこの気候とは思えないほど薄着をしていた。早めにストレージからパイロットスーツを取り出すべきだった。
あまり時間をかけると、少女にも影響が出る。
「すぐに片付けよう」
次の敵に狙いを定める。
あと三機。少女の味方二機に近い敵を狙う。
『まて！　何なのだ貴様は!!』
足首から凍り始めた機兵のパイロットから通信が届く。
それと同時に手にしているガトリングガンが回転を始める。
仲間三人を失ったのだからクソ野郎、とでも言っているのだろうか。
なんにせよ、斬るだけだ。
雪を振り上げて肉薄する。

ガトリングガンから銃弾が打ち出されているが、届く前に白煙に拒まれ地に落ちていく。
『そんなバカなことがあってたまるか⁉　天空神様の御創りになられた機体が‼　こんなっ』
両手で振り下ろされる大太刀は、半分氷塊と化した機兵を容易く切断する。
何やら長い口上の叫んで散っていったが、どんな意味があったのか。
もう全身が氷塊になった機体が動きを止めた。
「あと、二機」
そう言って目を向ける先には背を向け、全速力で逃げていく敵。
スラスターへエネルギーを回し、姿勢を低く取る。
噴き出す火が蒼く変わった瞬間、前へ。
掠った氷塊が、轟々と崩れる音を背に加速する。
エッケガルニに先行して白煙も這う。まるで獲物を追う猟師と猟犬のように二機

の敵を追い立てていく。
鈍重な大楯が捕まった。スラスターで浮き上がるも、大楯が重かったのだろうすぐに脚をついてしまい白煙にまとわり付かれる。
『もはやここまでか。だが、新兵は逃してもらうぞ……！』
何か言いながら振り返り、大楯を構える。
が、その動作が遅すぎる。
エッケガルニは大楯の横をすり抜け、変わらず逃げ続けるもう一機を追った。
『な、待てっ』
地に脚をつけた敵は放っておいても、結末はわかっている。立ち止まる必要など何もない。
最後の一機の足元に、白煙が到達した。
辛うじてスラスターで浮いているためまだ付着してはいないが、下では今か今かと渦巻き、正確に敵の足元に張り付いている。

『き、聞いてねえっ……！　帝国がこんな化け物を隠してたなんて！』
スラスターの燃料が尽きたのか、ガス欠の音を立て地に脚をついた敵に、白煙が殺到した。
脚から染まり、腕をつき、みるみる氷像に変わっていく。
エッケガルニが追いついたころには既に胸部の一部を除き氷塊へと変貌していた。
死に方が、氷像にされるほどの凍死というのは、どれほどの苦痛なのか分らない。
だが、今コックピットにいる少女の前に立ちふさがるなら俺が相手になろう。
この子が犯罪者なのかもしれない。
なにか追われる理由があるのかもしれない。
それでも、俺をあの場所から連れ出してくれた少女を。
二年待って、やっと見つけてくれた人を。
『お、おい、やめてくれ……。死にたくねえんだ！　助けてくれ！　こんな死にかた嫌だ！　誰か！　誰かぁ!!』

害する敵なら、一切容赦はしない。

「戦闘終了」

そう決めた空には太陽が顔を出し始めていた。

六機を撃破し、二機の味方だろう機体の近くまで移動する。
近くで見てみると、その状況に目を見張った。
長槍を持っていた機体は、先ほどまで微かに動いていた。
しかし敵がいなくなった瞬間から膝から崩れ落ち、動きを止めている。
頭部や胸部の弾痕は貫通することなく半分ほど喰い込んだところに弾丸が確認できた。
内部の構造が見えるが、余分な空間が無いほど緻密に配線や装甲が詰め込まれていて、技術力の高さがうかがえる。
西洋両手剣の機体のパイロットは絶望的だ。
三〇以上の弾痕が重なり合い、残った弾丸の数が合わない。
先に着弾したものは誘爆を起こしたようで、内側から装甲がめくれ出てきている。
そして、それは腹部から胸部にかけて起こっていた。

頭部にコックピットがない以上、胴体にあるはずだが何も残っていないのは一目瞭然だった。
長槍のほうへ近づき、膝を折る。
コックピットハッチを開放し、手を添えて少女が出てくるのを待った。
少女が再び搭乗してくれるか心配ではあるものの、パイロットの安否の方が少女にとっては重要だろう。
『エステリッヅァ！　アグニ！』
少女が外に飛び出していく。
太陽が出ているとはいえ、寒いだろうにエッケガルニの手のひらへ移り、地面へおろす途中で飛び降りた。
そのまま倒れた機体の胸部へ近寄り、装甲の一部を開く。そこにあったボタンを押すと、機体の胸部装甲が展開していきコックピットが姿を現した。
そこにいたのは重症の青年。

『エステリッヅァ！』
少女がさっきから同じ単語を叫んでいる。
青年の名前だろう。もう一つの『アグニ』が西洋両手剣のパイロットの名前か。
少女の名前が知りたいところだが、今乗っていた機兵に意思があるとは思っていないだろうし、ひとりでに自己紹介などするはずもない。
名前はまたの機会をまつか。
エステリッヅァと呼ばれた彼の意識はなく、体に怪我はないようだが、頭から一筋の流血をしていた。
外傷での命の危機は無いようで一先ず安心した。
意識がない理由はわからないが、脳出血などでない限りは大丈夫だろう。
もう一機の方へ目を向ける。
エステリッヅァがいた箇所はやはり、見る影もなくなっていた。
辛うじて座席の面影のある破片があらわになっている。

死体も残っていない。
まだその辺を漂っている白煙に隠させることはできるが、心証が悪いか。
少女にこの状態を見せるべきか、否か。
『アグニ？』
エステリッヴァの症状を見て、外に出てきた少女が見上げていた。
エッケガルニに乗っていたときは剣で隠れていて見えなかったが、下からだとその惨状がしっかり見えているはずだ。
少女は見上げたまま涙を浮かべたが、グッと堪えて一礼して去っていく。
思ったより心の強い子だ。
どんな関係だったのかはわからないが、それなりに情のある相手だったことは間違いない。
人の死のあとで、前へ進み出すのは簡単なことじゃない。

少女は、意識のないエステリッヅァを引っ張り出すと、こちらに近づいてくる。
もう、ここから移動するつもりのようだ。
この場所を、マップにピンを指しておこう。きっと少女も、アグニの埋葬のために忘れたくはないだろう。
手のひらに二人が乗ったのを確認して持ち上げる。
四苦八苦しながら座席にエステリッヅァを座らせた。少女は自身がどこに居るべきか戸惑っていたので、座席を最大まで下げてスペースを確保してあげる。
そこにしゃがみこんだ少女を尻目にハッチを締め、スクリーンにマップを表示した。
『これは……？』
異世界に来たことで機能しないと思っていたが、ゲーム時より縮小範囲ながらもマップは機能していた。
縮小範囲というのはエッケガルニの目線で見渡すことができる範囲で、それでも

広い範囲だ。
山などで先が見えないところはそこまでしか表示できないが。
『変な形してるけど、さっきと同じなら、地図？　でもカスレスの街がない』
困惑しているようだ。先ほど小マップを見せたが、あれには動いている自分と敵など他にも情報があったから、地層図と自分だけでは分かりにくいか。
立体的にしてみるか？
スクリーンに映されている外の景色の、地平線をなぞり、それを上から見た図へと動かしていく。これで察してくれと、思っていたが会得したように頷いている。
『やっぱり地図だ。なんで急に……』
マップだと伝わっていると信じて、中心の自分たちがいる位置に人型の駒を立たせる。
その駒を適当に移動させてみせることで、今からどの方向へ進むべきか決めてもらう。

せめて、少女の向かいたい方角だけでも教えてほしい。
『移動したいところを教えろってこと？　ジンにそんな知能があるの？』
少しマップを見つめた後、少女は左手方向を指した。
この辺りで一番大きな山のある方角だ。マップ上で一番表示距離が短い。
あの山の向こうに街か何かがあるんだろう。

少女の指し示す方へ移動を始める。
怪我人がいるので、走るなどの激しい上下運動や、飛行などの負担の大きな移動をすることはできない。
ということで、脚部のスラスターを総動員してホバー移動することにした。抜刀していた雪を背中に預け、進み始める。
戦術の二つよりは遅いものの、これでも十分速い方法だ。
振動も自動車程度に抑えられている。

移動している間に、メニューからストレージを開く。
かつてゲーム内では、戦場で何日も戦い続けることや広大な世界で遭難することもあった。
そのため多くのプレイヤーは、もしもの場合に備えて携帯食料や水、替えの服などを少数ストレージに収納していた。
その替えの服の中から一番厚手のジャケットを取り出す。
背面に「エリンギ　ナス　トマト」の日本語とそれぞれのイラストが、でかでかと描かれているがいいだろう。遭難したときに多少は笑えるようにと選んだものだ。
『え、服？　何処から……。このジンの機能？　こんな戦闘に関係ない？』
少女はそれを広げて数秒後、エステリッヅァに掛けた。
いや少女に着てほしかったが、そう来るか。
ならばとストレージから毛布を取り出す。遭難時に備えてのものだが、忘れていたわけではない。眠っているエステリッヅァも同様だ。

『これって、エリンギとナス、それにトマトよね？　なんで服に描かれてるの？　それにこの文字。……わ、今度は毛布？　あったかい……』

少女が毛布に包まった。

思ってた状態と違う。逆じゃないのか。

暖房も付けたままなので、そんなにしっかり包まっていると熱くなりそうだがいいか。

エッケガルニの足元は既に、斜面になっていた。

標高はざっと、七〇〇メートルほど。さほど時間をかけずに登り切れるだろう。

山頂からの景色は、さっきまでと大して変わらない。

相変わらず一面が森になっており、そのほとんどが白く染まっている。

ここで方向転換の可能性もあるので、もう一度進む方角を示してもらったが変わらず直進し続けることになった。

マップが無ければずっと彷徨いそうなほど広い森だ。どの木も同じような形で、

まっすぐに進んでいるはずなのに少し曲がってしまってもすぐには気づけそうもない。

かれこれ二時間ほど進み続けているが、一行に景色に変化はなかった。

少女自身も暖かくなって睡魔が襲ってきたらしく、一時間ほど前に眠ってしまった。

眠そうに眼をこすっていた時に、念のため方角の確認をしたが変わらない指示をされた。

あれから進み続けているが、正しいか疑い始めていた。

日が沈み始め、暗視機能をつけようかというころに、前方に明るい場所があるのが分かった。

さらに進むと、その灯りがある場所はかなり大きな街、都市であることが確認できた。

果たしてあそこが目指していた目的地なのだろうか。
「おい、起きてくれ。少女さん？　おーい、起きろー！　もしもーし!!」
『んな……。んんぅ、あと一〇分……』
「おおーい！　絶対あと五分とか言ってるだろ!!　早く起きろー!!」
大声に反応し、一瞬目を開いて何か口ごもっているがまた眠りに入ろうとしている。
アニメの中でしか見ないようなやり取りに懐かしいと感じつつ、起きてくれないと進めない。
夜になりかけている今起こすのは申し訳ないが、仕方がない。
『なによ、うるさいなぁ。……あ、あの尖塔、スライクの街だ』
ようやく意識がはっきりし始めた少女に望遠映像と、小さくマップを掲示してそこに行くべきか問う。
ほどなくして、エッケガルニに見立てた駒をその街へと向かわせた。

「了解」
何もかもが二年ぶりだ。遠目からしか見えなかった街に心を奮わせつつ、足を動かし始める。
こういった時、巨大な人型の機械が向かってきたら地球なら大混乱を起こすだろう。
しかし、先ほど戦った機兵がある世界だ。多分門の近くまでこのまま迫っても警戒はされようが、それ以上のことにはならないと思う。
ならないよな？　正面から堂々と行っていいんだよな？
少し心配になって、マップを常に表示しておく。
いつ進路変更してもいいように身構えつつ歩を進めてくが、少女は気にした様子がない。
考えすぎだったか。
やがて目視で防壁が見えてきたころ、壁門から二機の機兵が進み出てくる。

その形状は、エステリッヅァとアグニの乗機と同じ型だ。
ならば味方と判断していいだろう。
戦闘の意思がないことを表そうと、両手を軽く上げつつ近寄っていく。
『問う、貴様はいづれの勢力か』
眉を顰めたくなる感覚とともに、通信が入ってくる。
この通信は少女に通してもいいか。おそらく誰だと聞かれているだろうから、答えなければ戦いになる。
『私は、ユティア。ユティア・リア・ファーガストです。この街を治めるゼネル氏に会うために来ました』
『ユテ……？　まさか、皇女様⁉　なぜ今になって……。いや、失礼いたしました。自分は、ゼネル辺境伯機士団の三番隊隊長、ベムゴといいます。辺境伯のもとへご案内いたします。どうぞこちらへ』
『ありがとう。お願いします』

話は終わったのだろうか、二機が門のほうへ振り返る。
三歩ほど進んだところで後に続く。少女が安どの表情を浮かべているところから、敵だったり交渉が決裂したりは、していないようだった。
『しかし、そのジンは皇族家の機体なのですか？』
『いえ、このジンは先ほど拾いました』
『拾……？』
『はい』
格納庫を目指している間に雑談でもしようとしているのだろうか、頻繁に通信が入ってくる。
正直、耳につく感覚が繰り返されてイライラする。
そのイライラを伝えることも出来なければ、この通信を切ることも出来ないの我慢するしかない。
やがて、ひと際広い場所に通された。

ここが格納庫。庫じゃないので駐屯地か、青空駐機場か。
とりあえず、人の多い位置なので最悪少女がエッケガルニを捨てても長く放置される心配はない。
その場に屈んでコックピットハッチを開きつつ、手を添える。
少し離れたところにはしごを持ってきている人がいるが、悪いが要らん。
エステリッヅァを引きずり出した少女らを、地面まで手で送り届ける。
はしごを持ってきてくれていた人が、それを放り投げてどこかへ走っていく。
悪かったから、それは元あった場所に戻してくれ。
二機からもパイロットが出てくる。
一〇メートル程度の機兵は上下にコックピットが開き、中は座席が一つあるだけでとても窮屈そうだ。足は下コックピットハッチよりも下に定位置があるらしく、抜き出してから這い出てきていた。
実に不便そうだ。

『皇女殿下、改めまして歓迎いたします。軍用にはなりますが装甲馬車でお送りいたします。……そちらの方は？』
『私の護衛機士のエステリッヅァです。今日の戦闘で意識を失う重傷を負ってしまったんです』
『わかりました。では医務室のほうで一度診察してから邸宅へお連れしましょう』
はしごを放った青年が今度は担架を抱えて寄ってきた。
迅速にエステリッヅァを連れていくための判断だったようだ。自分の判断ですぐに動ける人間は出世するだろう。
『ありがとう。よろしくお願いします』
『……ご案内します』
少女が離れていく。
また乗ってくれるだろうか。そう思いつつ、自由に動けないこの身体に悪態ついた。

軍の馬車には初めて乗りました。
ジンにも採用されている装甲で覆ったこの馬車は、思ったよりも揺れます。
この中じゃとても眠るなんてとてもじゃないけどできそうにない。
振動が最低限しか伝わらないあのジンは、あまり軍事に詳しくない私でも普通じゃないと思います。

帝城で意識を失った私は、エステリッヅァの操縦するジンの中で目覚めました。
初めて男の人の膝の上に乗ったけれど、そんなことに気を配れないくらいに狭かった。
今後はどうするのか聞いてみると、各地を転々として仲間を集めつつ潜伏することを勧められました。
私が指示を出さなければいけない立場に、緊張を感じつつすぐに軍や機士団を動員して反撃しないといけないのではと、伝えた。
そこで初めて、すでに敗北していたこと、帝都襲撃の前に起こった会戦でジンの性能に圧倒されて二時間も持たずに壊走したことを、知りました。
それから一月後、敵が連邦が私を探していると、大々的にビラをまきました。
出てこなかった場合、捕らえた皇族は処刑すると添え書きして。
私は、すぐに行くべきだと、今いる戦力で戦うべきだと考えました。

でもそれは許されなかった。
皆に総出で止められました。私まで失うわけにはいかないといい、誰も動いてくれませんでした。
ふた月後、連邦に捕らえられていたお父様たちが処刑されました。
あの時ほど、自分の無力を痛感したことはない。
それからの記憶はあまり残っていません。ただぼんやりと機会だけを待っていました。
まだ組織的に抵抗を続けているゼネル辺境伯領、ハルゼー公爵領へと、静かに目立たないように合流を目指してきました。
今日は誘導するアグニと共にカスレスの街から出発し、約四日間森で息をひそめつつスライクの街へ向かうはずでした。
どういうわけか、森へ入って早々展開する連邦軍に、行く手を遮られてしまったのですが。

見つかる直前、アグニが目立つように動きだし、隙をついてジンから降ろされました。
方位磁針を持たされ、真っ直ぐ東へ向かえと指示されつつ。
あのジンと出会ったのは、本当にただの偶然でした。
降ろされた後、東へ向かっているつもりで進んでいると雪が強くなりました。
防寒の魔法を纏いながら、それでも足を止めずにいると前方に洞窟がありました。
そこで一息つこうとしたんです。
その洞窟に入って、間もなくその扉が開きました。
ジンの操縦席の扉です。
なんの脈絡もなく、突然でした。
今思えば考えなしの行動でした。すぐに乗り込んだんです。
誰かの罠だとか、幻覚とかそういったことを何も考えてなかったんです。

ただ、私でも動かせることに期待して、二人が心配で乗り込みました。
乗り込んだ後、扉が勝手に閉じたときは焦りましたが、すぐにジンが動き始めました。
空中に文字が浮かび上がり、どこかのタイミングで止まりました。
私が何かしなきゃいけないのかと思い、その宙に浮かぶ文字列に触れると、私の名前が刻まれました。
「チェック完了、システムオールグリーン」
「K四―〇　エッケガルニ、出撃する」
聞き覚えのない言語が操縦席に響き、独りでにジンが立ち上がりました。
外の様子が、とてもよく見えました。帝国のジンは正面と左右、そして小さく後方の様子が見える窓が四つあるだけです。
でもこのジンは、全面ガラス張りのように見渡す限りすべての景色が見えました。乗り込んだときはガラスなんて一つも見ていないのにです。

このジンはすぐに歩き始めました。操縦のわからない私に教えるように、やたらゆっくりと。というのも、手足のところにある機器が勝手に動いていました。
私のことはこう動かすのだと、速度を速め腕も動かしだします。
一回転して攻撃するモーションを教えてくれたときは、頭がくらくらしましたが。
そのあとは、試してみろというように動きを止めました。
私は方位磁針を確認してそのまま真っ直ぐに、進むように操縦しました。
二人を助けるために、戻るために。
西へ向かって走らせていると、ガラス張りの窓に何かが表示されました。
動いている青い点と、集まっている八つの赤い点。
それが地図だとはすぐにはわかりませんでした。
窓に望遠鏡で覗き見たような、戦っている様子を見るまでは。
そのまま、参加して戦って、だめだったら逃げるか投降するかしようと思っていました。

そう決めたとき、ジンの制御ができなくなりました。
まさかこんなタイミングで故障かと焦りましたが、いらない心配でした。
「技能展開。全て、凍てつけ」
また聞き覚えのない言語が聞こえると、周囲が煙たくなっていきます。
それに触れると、連邦のジンは白く変色していきました。
そしてそのジンを斬ると雪だるまのように跡形もなく崩れていきます。
そうして、すぐに六機もいた連邦のジンを全滅させてしまいました。
エステリッヅァはまだ、息がありました。でも、アグニを助けることはできませんでした。
カスレスの街で会ったばかりでまだ人となりは掴みきれませんでしたが、とても誠実で美しい女性であったのは確かです。
それだけに、悔しかった。

この国はきっと、私が取り戻す。

帝国と連邦の間に何が起きたのか、政治に関わっていなかった私にはわからない。けれど、お父様が不当なことをするはずがない。許すはずもない。

半年間、連邦の支配を受ける街を見ていて間違っていると感じる。

どうしてこんなことになってしまったのか知って、そのうえで、私が帝国を取り戻す。

私もみんなも大好きだった平和な国を。

少女が降りてしまって、しばらく俺はここで置物になっている。
でもそんなに悲観はしていない。
足元には忙しなく動き回る整備士らしき人たちがいるし、捨てられたような様子ではなかったからだ。
短ければ明日にでも、少女が顔を出してくれるだろう。
二年に比べれば一日一晩など、待ち合わせで一〇分待たされるのとかわらない。
今のうちに、コックピット内で見れるようになったメニューの確認をしておこう。
たったそれだけのことなのに、二年ぶりというだけでワクワクしている。
【ステータス
役職変更
衣装変更
ストレージ

機兵召喚
テレポート（機兵）
グラフィック設定
音量設定
オプション設定。
データアップデート
ログアウト　　】
【機体名　Ｋ四―〇　エッケガルニ
所有者　ÅйеЪД・∫∫цД・Д∫∫йЁ∞（ЪÅж∴　】
変わっている箇所が一つある。変わっているというか解放されている項目があった。
衣装変更。正直一番いらなそうな項目である。いや、設定類よりはまだ有用か？
とりあえずそれを選択してみる。

【エッケガルニ　↑
ボウル
月
花　　】
謎の選択肢が出てきた。
エッケガルニは言わずもがなだが、ボウルとは何だろうか。
月と花は武装の一種だ。遠隔操作が出来るタイプの銃で、頭で指示を出せば自動で動く兵器だった。
今はエッケガルニを選択しているようだが、意味が分からない。
月と花に関してはストレージに入っているので、周囲に人がいないときに取り出してから試してみようと思うが、問題はボウルだ。
思い浮かぶのは料理に使う容器だが、そんなものストレージに入っていないし、同名の他のものもない。

試すべきなのは確定だ。
有事の際に選択肢の一つになったり、危険で触らないように気を付けるようにしたりと、どう転ぶかわからないからだ。
今か、また時を改めてか。
……まあ、ボウルなんて名前で危険なことになることなんてないだろうし、暇だしやってみるか。
衣装変更からボウルを選択する。
視界に変化はない。変わらず座席の上だ。
エッケガルニの容姿が変わったのだろうか。外の視界に移って確認しようとしたが、出来なかった。
先ほどまで自由に移すことができていたはずなのに出来ない。
今度はコックピット内に固定かと焦る。
変更したのは衣装のみ。深呼吸を一つ、息を整え衣装変更の設定をエッケガルニ

へ戻してみる。
視界は移すことができた。
一瞬の事とはいえ、生きた心地がしなかった。
……なるほど、コックピット内視点になった時の端末というべき個体がボウルというのか。
この機体に関しては全て知っていると思っていたが、そうでもなかったようだ。
もう一度ボウルに衣装変更してみる。
ここに視界を固定するだけの機能なのだろうか。それだけなら別になくても困らない、むしろいらない機能だ。
コックピットを見渡してみる。座席は倒されて最大まで後ろに下げられているので、初めに見た時よりも広い。
自動車と同じ要領で席を戻す。
少女が包まっていた毛布を手に取って畳む。

そういえばジャケットは持っていかれたな。
あと一着同じものがあるからそこまで気にしないが、化学繊維の服なんて珍しがられるんじゃないか？
毛布を座席に置いて、気がついた。
視界が固定されていない。
それだけじゃない。手がある。
今、毛布を畳んでいた手が。
人の手ではないが自分の意思に沿って動くものが、視界の左右から二本。感覚的には後ろ側にも二本。そして上下に一本ずつ。計六本の感覚がある。
今は二本しか出しておらず、あとの四本は収納されていることも解る。
人間が無意識に手を動かせるのと同じように、俺自身も全ての腕の存在と所在が解っていた。
不思議な感覚だ。

気付くまでは何も感じなかったのに、気付いてからはあるのが当たり前と思っている。

正面のスクリーンを黒くして、姿見の代わりにする。

そこに映った自分は球体だった。

直径二十センチ程度の青を基調とした球体に、紺色の二本線が一周している。

二本線の間に丸いモノアイカメラが取り付けられていた。飛び出したりせず固定されているようだが、人間と変わらないくらいの視界がある。

左右は三等分されているような意匠が施され、真ん中の広いところは前方向きの腕の収納になっていた。折りたたみ式の全長約四十センチ程の腕が伸びており、先端には三本の指がある。

二本の腕を伸ばした球体が宙を漂っている。

エッケガルニと比べて遥かに小さく、動きやすい体を手に入れて喜ぶべきところだが、絶妙にキモい。

腕をしまい、球体になると可愛げも出てくるが腕を出すとキモいと思う。
あとの四本も出してみよう。
まず後方向きの二本。三等分されていた左右の下側に収納されていた。前用と違い収納が狭く、従って全長も約二十五センチと短めになっている。
腕というよりも安定脚といった方がしっくりする。
上下の腕はモノアイカメラと同じ二本線の間に、前方向きに収納されていた。他の四本よりも細い代わりに全長は長く六十センチ近くある。
何をするための腕なのか見当もつかない。
全ての腕を収納し、コックピットハッチを開く。
せっかく小さくて自由な体を手に入れて、すこし動き回ってみたくなったからだ。
この腕でどのくらいの重さまでなら持ち上げることができるかも知っておきたい。
なるべく目立たないように物陰に隠れつつ、エッケガルニから離れる。
この世界に来て初めてみる街並みを眺める。

地球でいうところの中世から近世に移ろうくらいの漆喰や木造、時おり煉瓦造りなどでできた家屋が並んでいた。
人々の服装の大半は麻で出来ているように見える。物語の中でしか見たことも聞いたこともない繊維だが。
夕食どきらしく、飲食店からは酒を煽る声や人の笑い声などがきこえ、人足も少なくはない。
懐かしい。
この街に来たことなどないが、人の営みを見るだけで感傷的になる。
食べ物を食べてみたくもあるが、口もなければ味覚も忘れてしまった。
そこに背を向け、人の少ない場所を探す。
誰もいない路地についた。どこかの店の物置だろうか、大小さまざまな箱が乱雑に置かれている。
前方向きの腕は、一番重たいものを持ち上げることができた。五十キログラムほ

どだったが、それを難なくだ。
後方向けや上下の腕ではできなかったが、それぞれ三十キログラムくらいなら持てるようだ。二本ずつではなく三本四本と増やしていけばもっと重たいものも持てるだろう。
『よいしょっと』
人の気配がして箱の裏に隠れる。
様子を伺っていると、ここら辺の箱の持ち主なのか大柄の男が箱を漁っていた。
『小麦、小麦……。よく見えんな。《ファイアボール》』
探し物が見つからないのか、男が魔法を唱えた。
この世界には、魔法も存在するらしい。
機兵があるだけかと思ったが、魔法もあるのか。つくづく【ガイアアース】と似ている世界だな。
男は探し物を見つけたのか、紙袋を二つ抱えて戻って行った。

魔法。この状態でも使えるだろうか。

【ガイアアース】でエッケガルニを操縦するための役職、機械機兵になるための過程に魔導士の役職をカンストさせなくてはいけなかった。

そのため一定以上の魔法は扱えるはずだが、異世界に来てからは試してもいなかった。

「《ウォーター》」

左腕を出して呟くと、指先から水が流れ出ていく。

この状態でもできるようだ。エッケガルニの体でも試してみたいが、それはまたの機会だ。

魔法を使うためのマナのパラメータがステータスの表示から消えていたため、どれくらいで限界が来るのか。高位の魔法は行使することができるのか。

初歩の魔法ができたことで、ほかにも気になることが増えたがそれを今ここで試すわけにもいかない。

エッケガルニで試すときに、一緒に調べることにしよう。
では今この状態でできることといえば、観光くらいか。
観光しつつ、少女を探してみよう。
街の人たちを見る限り、少女は高貴な家の人間なんじゃないかと思う。
着ていた服が明らかに違うからだ。
それに西洋甲冑の機兵から降りてきた人が丁重に接していた。
ならば中央に見える大きな建物にいるんだろうと簡単に予測できる。
「まあ、いろいろ見て回るとしよう」

マップを見ていたからわかってはいたが、この街はかなり広い。
東京ドーム何個分という大きさ比較はわからないが、東西に三キロ南北に四キロほどの大きな楕円に近い都市だ。
大通りを通らなければ簡単に迷ってしまいそうだった。

大通り沿いの人々の営みは明るいものが多かったが、武装した兵の数も多くその表情は明るくない。
この都市の上層部には、なにか後ろ暗いものがあるのだろうかと勘繰りしてしまう。
一番大きな建物に近づく。その建物は屋敷と教会が合わさったような、地球では見たことのない建造物だった。
これがこの世界のデフォルトなのか、信心深い人が建てさせたのか。
この屋敷の近くにも軍の駐屯地があり、甲冑機兵が五機待機していた。
その近くをスルーして正門から堂々と屋敷に入る。
広い庭は美しく保たれていて、冬でも咲く種類の花が花壇を彩っていた。
窓から各部屋を覗いて少女がいないか確認して回る。
こうしてみると、広い屋敷でも使われていない部屋が少ない。
人がいない物置が多いが、様々な種類の物がそれぞれまとめられて仕舞われてい

る。
貴族は見栄のために大きな屋敷を立てている、というわけではないことを知れたのは面白い発見だった。
教会部分は、キリスト教の教会とコンサート会場を足して、二で割ったような内装だった。三階部分までぶち抜けで作られ、五百人ほどは入れそうだ。
十字はないが、代わりに丸に縦棒が刺さるような意匠のモニュメントも飾られている。
換気のためか、その大講堂の三階部分の窓が開いていたので中に侵入する。
外から見ても少女はいないようだったので、中から探してみることにしたからだ。
なかなか見つからなかったが、やっと一つの部屋から少女の声がした。
扉の前や隣の部屋には人がいて近寄れないが、声を聞くだけなら二つ離れた部屋からも聞こえるのだ。
『では、この国の中より、教国に行ったほうがいいということですか？』

『はい。我々としてもすぐにお迎えしたい気持ちはございますが、姫様に旗印として立っていただくと、すぐに連邦軍が来るでしょう。明らかに準備期間も、人員も足りません』
『だから、教国に助力を乞う』
『はい。我々が準備を進めている間に、後詰めの兵と物資の援助を取り付けていただきたく思います』
『わかりました。お話はしてきます。……でも、受けてくれるでしょうか』
『難しいところです。正規軍が負けた相手です。そう簡単に頷いてはくれないでしょう』
『そうですか』
『ですので、せめて物資の援助を取り付けてください。でなければ一年と持ちませぬ』
声的に年配のおじさんと話し合っているようだが、意味は分からない。
ここが少女の家、というわけでもないようだし関係性も謎だ。

なんとかこの世界の言語を勉強していかなければ、意思の疎通もできない。
江戸時代の日本人のように、一つ一つの単語から入るしかないのだろうか。
『いつ出発しましょうか』
『馬車で行っていただこうと思っておりますので、早ければ明日にでも』
『馬車、ですか？』
『何かご都合が悪いでしょうか』
『私が乗ってきたジンで行こうと思っていたので』
『ああ、あの巨大なジンでございますか。……失礼ですが、戦力として残しておいていただきたいのですが』
この世界でいう『ジン』が機兵に準じた単語であることは分かる。
少女が最初にエッケガルニを見上げて言った単語だし、この都市に入る前の通信でも発言の途中に交じっていたから。
挨拶の一種かとも思っていたが、独立して言われた場面は見たことがなければ街

の人々は一切そんな発言はしなかった。
『そんな。……でも、あのジンには私の名前が』
『所有者登録が？　一部の機種にはそんな機能がありますな』
『だったら』
『確かに一昔前まで登録は解除できませんでしたが、最近は簡単に解除できるようになったのですよ。だから問題はありません』
『そ、うですか』
『ご理解ください。ここを守るためです』
『……はい』
だから俺に関する話をしているのだろうが、全くわからない。
少女の声色が弱々しくなっていくのは、どうしてだろうか。
俺を森へ帰してきなさいと怒られているのか、得体のしれない機兵に乗るなと怒られているのか。そもそも怒られているのか。

どうしようもない言葉の壁に、どうにもできない歯痒さを感じた。

そろそろ夜が明ける。
昨夜、少女はそのまま屋敷に一部屋を借りそこで就寝するようだったので、エッケガルニへと帰還した。
定位置の座席の上に戻ると、衣装変更でボウルからエッケガルニに戻す。
ストレージの中でも確認しておこうと思った矢先、軍人の一団が足元に集まってきた。
見世物になったような気分で快くは思わないが、物珍しいだろうし仕方ないことと割り切って、逆に彼らの動向を見ていてやろうと思った。
見上げたまま時々指さして何かを言っていたり、後ろに回って目を輝かせていたりと、ここまでは面白かった。
しかし、はしごを多数抱えて持ってきたあたりから雲行きが怪しくなってくる。
胸もとを叩いたり、小さな装甲を剥がそうとしたり。多分何をされても耐えられ

るし装甲も剥がされはしないが、人を何だと思っているのだろうか。
コックピットハッチを開こうと悪戦苦闘しているのだろうが、そんな行動をとる人は怖いし開けてやらないことにした。
そうして一晩中彼らの頑張りを眺めていると、東から太陽が見え始めたのだ。
『おい！　まだ進んでないのか！』
『すみません！　どうにも扉がどこかも、どうすれば開くのかもわからずで』
やがて、怒鳴りながら老人が近寄ってきた。上役の人なのだろう人をどこかに走らせ、険しい顔をしながら見上げてくる。
そんな顔されても、何されるかわかったもんじゃないから開かんぞ。
それから一時間ほど悪戦苦闘が繰り返されているのを眺めていると、馬車が近くに止まった。
そこから出てきたのは少女だ。昨日とは違うものの、変わらず白く動きやすそうなドレスを着ている。手にはエステリッヅァに掛けていた、俺のジャケットを抱え

ていた。
『何をしてるんですか』
『御覧の通り、操縦席の扉を開こうとしております』
『そんなに乱暴したら、開くものも開かないじゃないですか』
『それが、何を試しても傷一つ付かんのです』
少女がご立腹そうにしている。
手荒なことをするなって感じだろうか。そうだったら嬉しいが。
『では、姫様開けていただけますか?』
『……わかりました。でも、離れててください』
少女が近寄ってくると同時に、老人や軍人の一団が下がっていく。
手のひらを差し出す。彼らが離れてくれて助かった。
乗ったのを確認し、胸元まで移動させコックピットハッチを開く。
『ごめんね、あなたのことを軍人さんにあげなきゃなの。このまま待っててね』

少女は乗り込むことはせず、振り返った。
何かをコックピットに向かって言っていたが、何と言っていたのか。哀愁を感じさせる表情に、余計に言葉の意味が知りたくなった。
下がっていた軍人たちが寄ってくる。手のひらへ向けてはしごをかけて、二人上がり始めた。
少女がいいのならば、コックピットを見せるくらいなら別に構わないが。
操縦は少女にしかできないぞ。印象が悪くてできてもやらせないけど。
軍人の一人、ガタイのいい男が乗り込んでそのまま座席に座った。
『姫様、こいつの起動はどうしたらいいんですか？』
『え？　乗り込んだら勝手についたので……』
『じゃあ、姫様が座ってみてください。起動するかもしれない』
操縦桿を握って数秒した後、少女と男が言葉を交わして交代した。
乗り心地が良い悪いの話でもしていたのだろうか。

少女が座ったので一応、起動シーケンスを開始する。
「システム起動、機体各位チェック、燃料残量チェック」
昨晩からいろいろされたが、やはり何の影響もない。燃料は若干減っているが、まだまだ余裕はある。
手のひらの上にはまだ軍人たちがいるので、操縦桿のロックは外さないし、ハッチも開いたままだが左右のスクリーンも起動させ、今できる準備はすべて整った。
「チェック完了、システムオールグリーン」
本当は次に少女が乗ってくれた時に、試したいことがあったのだが人が多くてできそうにないな。
『本当に姫様が乗ると起動しやがった。……俺にこいつが扱えるかね？』
『扱ってもらわねば困る』
『はいはい。……じゃあ姫様、場所を代わってください』
『ええ。丁寧に扱ってね』

『了解です』
え、起動した状態でほかの人に座らせるのか？
少女はどこか悲しげな雰囲気を発しているし、ガタイのいい男の頼みを断り切れなかったのだろうか。
座席に座る彼は楽しそうにしているし。
『じゃあ、所有者登録を変更しちゃいましょう。多分、このジンは登録した人に反応して起動するみたいですし』
『じゃあ、作業始めるぞ。これ持って』
座った男とは別の、眼鏡をかけた男がガタイのいい男にコードのついた棒を持たせた。
コードの先には発電機のような機械がつながっている。そして、もう一つの棒を少女にも持たせた。
最後に三つめはコードのみで、操縦桿に巻き付けた。

『では、一瞬静電気を流します。それでこのジンに二人が同一人物だと錯覚を起こさせガランドも所有者として認識させます』
『ああ』
『……はい』
『では、行きます。三、二、一』
パチッと静電気が流れた。
眼鏡の持つ機械から発せられたのか、棒を持っていた二人が一瞬肩をすくませた。
俺にも流れたようだが、静電気程度では何の問題もない。
と思っていたが、少し違和感を感じた。少女が二人見える気がする。
『どうだ、ガランド動かせそうか』
『どうだろう。いける気はするが』
『それで十分だろう。姫様も協力ありがとうございました。変電機を回収します』
『……はい。じゃあ、これで』

そんなはずはないのだが、感覚として二人いる。
手のひらの上にいる少女と、座席に座っている少女。
いや、座席に座っているのはガタイのいい男のはずだ。
なんとも不思議な感覚だ。昨日自分を救ってくれた存在が二人いるなど多幸感すら感じる。
居心地はいいが、記憶を思い出せないときに似た妙な突っかかりが気になる。
この現象を長引かせるわけにはいかない。
『じゃあこのジンについてもう少し調べてみようか』
『ああ』
何かエラーが起こっているのではないかと、メニューを開く。
【機体名　Ｋ四―〇　エッケガルニ
所有者　ÅйеЪД・∬цД・Д∬йЁ∞（ЪÅж∴
＋д¤∬ЖФш¤　】

ステータスに謎の一文が増えていた。
『なんか空中に出てきたぞ!?』
『見たことのない言語だが……。お、ここは読めるぞ』
この感覚の原因はこれか。
即座に所有者から外した。
『反対で読みにくいが……。何か消えたぞ』
『おい、変なとこ触ってないだろうな』
『何も触ってはいない!』
俺の所有者はしばらく、少女だけでいい。
勝手に俺を動かそうとするな。
そう思うと、この二人に怒りという感情がわいてきた。横から飛び出てきて、軍人だからか何だか知らないが少女に成り替わろうとしやがって。
衣装変更でエッケガルニからボウルにチェンジし、即座に体当たりを敢行した。

男二人はコックピット内に入り込み、少女だけが手のひらの上に居たのはいい状況だ。
手のひらを少しずらして男二人を弾き飛ばす。
受け止めてくれるはずの手のひらがないので、悲鳴を上げつつそのまま地面に落ちていった。
精々七、八メートルなので命を落としたりはしないだろう。
「二度と乗ってくんな馬鹿が」
『え？』
「え」
落ちていった二人を確認するために外に出ると、少女と目が合った。
ボウルに目といえる目はないが、見つめ合ったまま動けないのでその表現で合っているだろう。
それに今言葉を発していたのも気づかれたか。最悪な形でのお披露目になったな。

『あなた、あのジンの……？』
「やっぱ何言ってるか分かんねえ」
親指でも立てておけば、敵対意思がないことは分かってくれるだろう。
左腕を取り出し、三本指でグッドサインを見せる。
『……フフッ。なにそれ』
さっきから暗い表情をしていた少女がクスクスと笑う。
笑顔が戻ってきてくれてよかった。
『もう一回、あなたと行きたいって話してみるね。馬車で行くよりずっと楽しそうで、ずっと頼りになるもの』
ひとしきり笑うと、少女がボウルを掴んだ。
突然すぎて意味が分からないが、はしごで降りようとしたので地面まで手のひらを下ろしてあげる。
どこかへ連れていきたいのだろうか。

ならエッケガルニのコックピットハッチを閉じておかなければ。
視界の端で、昨日担架を持ってきてくれた青年がまた二つ抱えて寄ってきていた。

少女に抱えられたまま馬車に乗り込む。
少女の他には、メイド服を着た女性と壮年の兵士、そして朝方怒鳴っていた老人が乗っていた。
『しかし、姫様以外の搭乗を拒否するなんて……』
『あのジンには意思が宿っているのでしょうな』
『だからか、あんなに頑なに扉を開かなかったのは』
『そんなことがあったんですか？』
『うむ。昨晩から色々試させておったが、全く開いてはくれませなんだ』
どこへ向かっているんだろうか。
十中八九、昨日見に行った屋敷だろうが言葉の通じない球体を連れて行ってどう

しようというのか。
『姫様、着いたようですぞ』
『ありがとう』
『我々も一応は同席しますので、ちゃんとお伝えください』
『ええ』
やはり屋敷だ。抱えられたまま正門をくぐる。
いつまでも抱えていなくても逃げないし、ついていくから放してくれてもいいと思うんだがな。
そのまま階段で三階まで上がると、昨日話し合いをしていただろう部屋の前まで来た。
『ゼネル卿、いらっしゃいますか？』
『姫様？　どうぞ中へ』
『失礼します』

部屋には、昨晩と同じ声のおじさんがいた。
礼服を着込み、口に周囲に立派なひげを蓄えている壮年の男性。目力も強く、にらみつけられたら背筋に冷たいものが流れそうだ。
『なぜこちらへ？　ジンの引き渡しをしたらその足で教国へ向かう手筈では』
『それが、ジンの所有者登録の変更に失敗しまして』
『なにか失敗するようなことがありましたかな？』
『ちゃんと起動できるようにはなったんですが、私以外の方は乗せてくれないようで』
『何？　本当か、ヴィラス』
『はい。姫様の代わりに乗り込んだ二人を、そこの球っころを使って追い出しまして』
『やはりあのジンで向かっていただいた方がいいのではと』
『ふむ。……戦力を追加できなかったのは痛いが、扱えんでは意味がないか。わかりました』
『ジン』と俺を指す言葉を扱った話をしているので、緊張してくる。

誰かが怒鳴りだしたら、まずい方向に話が進んでいっているとわかるが、抱えている少女の表情からは悪い方向に進んでいっているようには思えない。
いい方向に進んでくれているといいのだが。
『では、姫様はそのジンで教国へ向かうよう、お願いします』
『はい』
『他の者も馬車で追いますので、予想通りなら一週間後には合流できましょう』
『では、すぐに出ます』
話し合いは終了したのか、二人が頷きあい少女はまた来た道を戻っていく。
エッケガルニに向かっているようだが、意図はわからない。
『またよろしくね』
ただ、抱き続けている少女は笑顔で悪いことにはならないだろう。

エッケガルニに乗り込み、少女が座席に座る。
同行しようという者はいないようなので、コックピットハッチを閉じ、システムを起こしていく。
操縦桿を握り動かそうとしているので、立ち上がりつつマップを表示してどこへ向かいたいかを聞いてみる。
その意図を察してくれた少女が指し示したのは、街の外。西の方角だ。
この街が少女の帰る場所ではなかったようだ。
この駐屯地から西の方角へは都市の中を少し通らなくてはいけない。
でも、昨日と違って重傷のエステリッヴァは乗せていないので、空を飛んでも問題はないはずだ。
少女の様子を確認しつつ、飛んで向かうことにしよう。
そう決めたエッケガルニは、脚部のエンジン、スラスターに力を込めて少しずつ

垂直に上がっていく。
『わ！　わ、浮いてる!!』
一〇〇メートルほど浮き上がると、背中のメインスラスターを噴射した。

マップを指す少女の指示に従って、かなりの距離を西進した。
時間にして六時間。少女の体に負担をかけないよう、あまり速度を出してはいないが、それでも時速八〇キロほどは出している。
四八〇キロの道のりを進んでも、少女のいう場所にはたどり着けないらしい。
東京から岡山県まで届くくらいの長距離だ。
時々休憩を挟もうと立ち止まっても、動かそうと操縦桿を握るので、休憩らしい休憩はせずにここまで来た。
スクリーンのマップと持参した地図を見比べつつも、まっすぐに進ませるので道に迷っているわけではなさそうだが。

『そろそろ国境を越えたくらいのはず……。だから少し南の方におっきな湖があって、そこからはすぐ……』

時折見える街を無視して飛び続けてきたが、森が多い世界だ。地球の、それも日本に居たからか、見渡す限りの森というのは馴染みがなかった。

ましてはこの長距離でもそれが変わらないのは、気がおかしくなりそうだ。

こうも森しかないと、二年で見つけ出してもらえた俺はむしろ運がよかったのではとすら思う。

やがて視界に変化が現れた。

緑の中に光り輝く青が見え始める。望遠でズームしてみるとそれは水だった。

両端が見えているので海ではなく湖のようだが、かなり広い。昔見たことがある琵琶湖よりも広そうだ。

少女にも共有しておこう。

『あ、湖？　ってことはシオリア湖がここで、西から向かってるから……』

湖を超えたあたりで、少女の指示が変わってきた。
南の方向へ行きたいようで、山を目印に南西方向へとずれていく。
太陽が地平線に沈み始めたころ、前方に白い点が見えた。
それはやがて横に伸びていき、明らかに人の手が入った代物のようだ。
少女にそれを見せると、そこが目的地らしく嬉しそうに頷く。
『もう着いた⁉　すごい、このジンとってもすごい‼』
結局六〇〇キロ近く移動した。この世界の移動手段は馬車で道を進まなくてはならないので一週間以上かかる道のりではないだろうか。
少女の喜びようから急いでいたのだろう。この時短が助けになればいいのだが。
改めて目的地の方へ注意を向ける。
白く長いものはどうやら防壁のようだ。それもかなり大規模。
今朝までいた都市と同サイズの都市が囲われ、それが六つ、六角形に存在していた。
それらの都市も防壁でつながっていて、それらの内側には広大な牧場や農場が広

がっている。
そして、その六角形の中心にも、もう一つ都市が白い防壁に囲われて存在していた。
ここまで幻想的で美しい都市は見たことがない。
『聖都ヴァルヘルム。もう着いた』
高度を少し下げつつ近づく。
よく見ると、白い防壁の上には砲台が備えられた部分が多数見受けられた。
当たるつもりはないが、攻撃を始められる前に敵対意思のないことを伝えなければ。
あの砲撃の射程はわからないが、白い防壁から三キロ離れた平原に降り立つ。
ここからは少女が動かすなり、迎えを待つなりして成り行きに任せよう。
少女が操縦桿を握り前進する。
やがて都市の方から六機の白い機兵が進み寄ってくる。
今まで見たことのない形状だ。

西洋甲冑と似てはいるものの、背中には灰色の機兵と変わらないスラスターを背負っている。
手にしているのはライフルだ。
時代錯誤の気がしてならないが、間違いなくライフルを握っている。
『そこのジン、今すぐ動きを停止せよ。繰り返す今すぐ動きを停止せよ』
そして、その銃口をこちらへ向けて通信をしてくる。
すぐに少女にも聞こえるようにすると、操縦桿を手放した。
『所属勢力と官姓名を名乗れ』
『ファーグスト帝国第二皇女、ユティア・リア・ファーグストです。教皇様と従姉のガラシア様に会うために来ました』
『……は？』
銃口がわずかに揺れ、通信からも困惑の色がうかがえる。
少女は何を言ったのだろうか。

『……何か、身分を証明できるものはございますでしょうか』
『姿を見せれば、納得していただけますか？』
『ハッ。……全員銃口を上げよ』
白い機兵たちがライフルを天へ掲げた。敵対意思がないのは伝わったようだ。
しかし、不思議なことに少女は立ち上がって、正面のスクリーンを押している。
何をしているかわからないが、白い機兵のうち一機がコックピットハッチを開いたので少女も外に出たがっていると察することができた。
『ごめんなさい。操作がまだおぼつかなくて』
『いえ、大丈夫です。……私は第三地母神機士団所属、ローウェ・ラッセと申します。本人であると確認できました。中へご案内いたします』
『ありがとう』
地面に降りるのかと手を差し出したが、コックピットハッチの上に立ち、ともに外に出てきた男性と話すにとどまった。

コックピット内に戻ってくると、白い機兵に囲まれるようにしながら都市の中へ移動する。
外に面した防壁、外壁に面した都市へ入り、行進しながら中央に存在する都市へと足を延ばした。
『この先はジンでは移動できませんので、こちらでお降りください』
二回目の防壁をくぐると機兵が並べられた格納庫に直通していた。
その一角に案内されて、少女も操縦をやめたのでエッケガルニの長旅はここまでらしい。
コックピットハッチを開放し、俺も衣装変更でボウルに移った。
少女のそばを漂いながらついていく。
『殿下、大聖堂までは私の妻で侍女のイライザがご案内いたします、が』
『が？』

『その後ろにいる球体は……？』
『私の護衛でペットです』
『護衛でペット』
『名前も付けてあげたいんですけど、喋れるみたいでもう持ってるかもなんです』
『喋れる』
『意味は解らないんですけどね？』
『我々を害したりは……？』
『しないです』
「どうも」
三人に指さされたり驚かれたりしたので一応あいさつしたが、言葉が通じないのは苦しいものだと痛感する。
都市の中はやはり馬車で移動するようだ。
今朝のようなごつごつした見た目ではなく、派手な装飾の豪華な馬車だ。

少女とメイドの女性が中へ乗り込み、案内してくれた男性が御者席に座る。
大きな街だと感心する。平屋の建物が見当たらず、何処を見渡しても二階か三階建てだ。
時折さらに高い建物も入り混じっている。
ふと見えた路地裏も清潔に保たれており、貧困とはかけ離れた都市といえるだろう。
そんな中、ひときわ大きな建物が近づいてくる。
飛んでいても目立ったその建造物の高さは一〇〇メートルを超えているくらいか。
大阪の通天閣もこれくらいだったと思う。
馬車はやがてその建物の中へと進み、発着場のような場所で止まった。
『イライザが事情を話してまいりますので、その間に応接室へご案内いたします』
『お願いします』
歩いて移動するようになってから、道行く人のほどんどがこちらを見てくる気が

するが俺を見ているのか少女を見ているのか。
多分少女のルックスの良さに驚いているのだろう。
こんな宙を舞う球体よりそっちの方が明らかに目の保養になる。
三階まで上がり、大きな部屋へと通された。
大会議室という名前の部屋だろうか、真ん中に空間の空いた大きな机とその周りを取り囲む二〇個の個人用ソファ。
そのうちの一つに少女が腰かけたので、俺もその隣に座った。
座ったというか、体形的には動いていないので着地と言った方が正確か。
壁際に立って待機している男性と少女が会話をしている傍ら、ソファが回転させられることに気が付き遊ぶこと一〇分、廊下から駆けている足音が聞こえてきた。
『ティアが居るってホント!?』
ノック等の断りをすることなく、女性が叫びながら入ってくる。
薄桃色の長髪をなびかせ、桔梗色の瞳が少女を見据えた。

『お久しぶりです、お従姉さん』
『ティアーーーー!!』
少女が立ち上がると、その女性が抱き着く。
叫んでいた女性の声色は、だんだん勢いを失い次第に弱弱しくなっていった。
『よかった……。ずっとどこにも現れないからもう死んじゃってるんじゃないかって』
『ごめんなさい。ずっと隠れてて……』
女性につられて少女の声も震えている。
久しぶりの再会なのだろう。邪魔するのは無粋だ。
回転していたソファを止め、二人から目を背ける。
男性も静かに部屋から出ていったようだ。
俺もついていこう。
扉が締め切られる前に廊下に飛び出した。
『君にも配慮の心があるのだな』

「俺に言ってる？」
『ふふ。本当に言葉が通じないのだな』
「なんて？」
男性に話しかけられたが、何を言っているかわからない。
こんな球体に話しかけてくれる物好きな人に言葉を教えてもらいたいものだ。
自己紹介でもしたら、いろいろ話してくれたりしないだろうか。
この世界の言語でかろうじてわかるのは『ジン』という単語が俺を指していることくらいだが。
「『ジン』、エッケガルニ」
とりあえずやってみよう。
『ジン？　エッケ……？』
腕を取り出し、自分のことを指しながら二つの単語を繰り返す。
この世界の言語でジン、自分の言語でエッケガルニ。そのことが伝われば、指し

たものの名称を言っていることも伝わってくれると思うのだが。
『ジンとは、殿下と君が乗っていたものか？　しかし己を指して言っているが、自分がジンだとでも言っているのかね？』
「『ジン』、エッケガルニ」
『後続の言葉がまた意味が分からないのだがね。変わらず己を指しているところを見るに、エッケガルニというのが君の名前なのかね？「エッケガルニ」？』
男性は俺を指さしてエッケガルニと聞き返してきた。
意図が伝わり始めてきのだろうか。うれしさのあまり何度も頷いてみせる。
今度はこちらがきいてみよう。
『今度は私を指しているが……。私の名を聞いているのか？　私は、ローウェ』
「『ローウェ』？」
『おお。そうだそうだ。伝わってくるぞ、君が話したがっているのが』
すぐに意図を察してくれた。男性は自分のことを指しながら『ローウェ』と名乗っ

てくれた。
何もわからない状態から、一歩も二歩も前進だ。
一人も絵でこんなに察してくれるなら、移動中に少女にも話してみればよかった。
次は近くにある者の名称を聞いてみたい。近くの壁にかかった照明に目を向ける。
「『ローウェ』、あれ、照明」
『ふむ。……あれ、ランタン』
「『ランタン』」
やはりローウェは質問を理解してくれているようだ。
明らかに日本語などとは発音が違うが、エッケガルニの自動機能と同化している影響か、記憶力が抜群にいいようだ。一度覚えてしまえば、すぐに言えるようになっている。
そのまま、その場にあった物の名称は覚えきることができた。
「『ローウェ』、ありがとう」

頭というか体全体を下へ向けつつ、感謝の言葉を告げる。恐らく意味は理解されないだろうが、ニュアンスは伝わってくれるはずだ。

『感謝、といったところか？「エッケガルニ」、どういたしまして』

彼もうなずきながら言葉を返してくれた。こちらもまだ意味は解らない。でもおそらくどういたしましてという意味が、どこかに隠れているのだろう。

『ローウェ、どうして扉の前に？』

『イライザ、それに教皇様、今二人が喜びを分かち合っているところでして』

廊下の奥の方から、一団が歩いてきた。先頭には二人。

一人は先ほど一緒に馬車に乗った女性。もう一人は、キリスト教の教皇が来ているような祭服を着ている老齢の男性だ。その後ろには三人の騎士が付き従っている。

位の高い人物なのだろう。

『そうかの。なら邪魔はしてはならんか。……生きておってくれたか』

『ハッ。ガラシア様のご様子からもご本人で間違いないかと』
『うむうむ。良かったの』
『しかしローウェ殿、第二皇女殿下の従者の方々はどこだ？』
『どうやら単身で来られたようです』
『何？　御一人でここまで？』
『ええ。とは言っても彼が付いていたようです』
ローウェと、老齢の男性、それと騎士の一人が会話をしている。
そこに険悪な雰囲気など何もなく、談笑しているようにも見えた。
ふとローウェが俺に手を向けた。
『彼……というのは、その浮いている物か？』
『ええ。エッケガルニという名で、殿下が乗ってきたジンに同乗していた護衛のようです』
『そうか……』

「『ローウェ』？」
『喋るのか⁉』
『はい。先ほどまで全く意思の疎通ができませんでしたが、かなり知能が高いようで少しづつ意思の疎通が可能になってきています』
『ほほう。面白い個体じゃの。ガラシアが喜びそうじゃ』
六人が俺を見ながら話し合っているのを眺めていると、大会議室の扉が開いて女性が顔を覗かせた。
『お待たせしました。どうぞ中へ』
女性に導かれるように六人が中へ入っていくのに追従する。
『ユティアよ、生きておったか！』
『教皇様……』
『そんな堅苦しい肩書では呼ばんでくれ。ほら、もっとこっちへ』
『おじい様っ！』

老齢の男性と少女が抱き合う。
泣き止んだばかりだろう少女の目にまた溜まるものが見えた。
三人は家族なのだろう。
それがあんな戦闘を目の当たりにして、六〇〇キロの距離を旅した。
これは二日のうちの出来事だが、俺と出会わなければもっと時間がかかったり、途中で力尽きたりしてしまったりしたかもしれない。
また会えてよかった。
どれ程ぶりの再会かは知らないし、事情も分からないがそれだけは言える光景だ。
これからも少女の助けになりたい。そう強く思えた。

『そうか。ゼネル卿はそんなことを』
『はい。何とかお手伝いいただけませんか？』
『……ううむ。手伝ってあげたい気持ちしかないが、わし一人では決められんことじゃ

の』
『幸い、他の使者の方が到着するまで一週間ほどあるようですし、その間に詰められるだけ詰めておきましょう』
再会の挨拶もそこそこに、少女がメインで話しながら六人は顔をつき合わせていた。
少女と俺が出会った時の話をしている様子ではない。
俺の理解できない話なので聞いていてもわからないので、離れた位置にあるソファで遊んでいることにした。
『……そんなことより、あそこにいるエッケガルニちゃん？　が気になって仕方ないのだけど』
『休憩がてら話しかけてみますかな？』
『連れてきますね』
くるくると回っていると少女が寄ってきた。難しい話は終わったのだろうか。

『あの子がいたからまだティナちゃんの心が保てたのね』
『豪雪の中ひとり逃げ惑うなど、心が折れてもおかしくはないでしょうし、護衛を一人救えなかったとはいえ、もう一人は救うことができたのもよかったのでしょう』
『うむ。しかし、エッケガルニといったか、スライクから聖都ヴァルヘルムまで七時間足らずとは恐ろしい性能だの』
『でも、アインハルトも負けないわ』
『かのジンと比較するのは野暮でしょう。あのジンは破格すぎる』
『あれも、特殊兵器群に属するモノなのかの』
少女に抱えられて、話に混ざることになった。
少女に上部を撫でられながら、一応話を着てみようと思う。
『こ奴は、物を指さしながら名称を言ってやるとすぐに知識として取り入れるようでして、先ほど廊下で少し教えてみました』
『ほう、面白いの。ほれ、おじいちゃんじゃ』

ああ、俺と話してみたかったのか。
「『おじいちゃんじゃ』？」
『おじいちゃん』
「『おじいちゃん』」
『ファファファ！　これは傑作じゃな』
今のはこの老齢の男性の名前か、爺の意味なのかはまだ疑問として残るが、同じ単語を返すことでいいリアクションをしてくれる。
『この子の言語もしかして』
『お従姉さん？』
この女性も何かを聞きたいのだろうか・
『ええと、「hello?」「您好？」「ｚｄｒａｖｓｔｖｕｙｔｅ？」「こんにちは？」』

耳を疑うとはこういうことか。
女性から、聞き覚えのある言語たちが発せられた。
撫でまわす少女と戯れていた両腕が思わず固まった。
一つしかないモノアイカメラが、女性を見つめて離れなくなる。
もう一度言ってほしいと、考える間もなく体を女性の方へ動かす。
『「hello?」「您好？」「ｚｄｒａｖｓｔｖｕｙｔｅ？」「こんにちは？」……伝わらないかしら』
「……こんにちは」
二度目を聞いて、耳を信じることができた。たっぷり時間をおいてやっと挨拶を返す。
『「こんにちは」は日本語ね。「初めまして。私はガラシアです」』
外国人がたどたどしい日本語で自己紹介するような姿に、全身が打ち震えるような感覚に襲われた。

もう二度と聞くことは叶わないと思っていた日本語を話せる人が、居た。
それがどうしようもなく嬉しい。
「初めまして。私は伊吹です」
『ガラシア様、もしかして』
『ええ。この子と話せるみたい。この子が扱っているのは日本語。伝承にあった古のアインハルトの操縦士と同じ言語よ』
『あの言語はすでに失われたものと……』
『お従姉さん！　この子はなんて言ってるの？』
『私の名前はイブキですって』
『イブキ。……イブキ！』
少女が額をモノアイカメラの上部へとあて、嬉しそうに名前を連呼する。
言葉が通じるかもしれない。それを嬉しがってくれているのが、一目瞭然だった。
それを感じ喜びたいのは俺も一緒だ。

だからこそ知りたい。
「あなたは？」
『？　お従姉さん』
『あなたは？　って』
この世界にきて、何よりも知りたかった言葉。
ガラシアと名乗った女性が通訳してくれたおかげで、少女の名前が分かった。
『ユティア・リア・ファーグスト。ユティアよ』
その瞳を揺らして、微笑んだ笑顔を俺は忘れない。
二年の束縛から解放してくれた少女の名前を、笑顔を。
忘れないし、無くさない。
俺の命がある限り護り続けよう。

その後、『おじいちゃん』と三人の騎士たちが出ていき、ローウェと侍女の女性もその後を追うようにいなくなった。
『じゃあ、私の部屋にいらっしゃい。まだまだ聞きたいことがいっぱいあるもの』
『はい！』
二人もどこかに移動するようなので、フラフラとそれに追従する。
こんなに大きな建造物だが、やはりエレベーターのような機械は無いようで二人は七階まで自分の足で上がっていた。
この建物の中にいるだけで、運動不足になることはなくなるんじゃないかと思うほどに広い。俺は宙を漂っているので関係ないことだが。
七階はそんなに広くないのか、吹き抜けの周囲に両開きの扉が八つあるだけ。
ガラシアはそのうちの左側、二つ目の扉を開いた。
『さ、今日からここに泊まりなさい。私と相部屋だけど』

『お従姉さんと一緒の部屋なんてダメでしょ？』
『私がいいっていうんだからいいの。ね？』
ガラシアがウィンクしながら何かを少女、ユティアに対して言っている。
ユティアは『わかった』と呟き、部屋の一番奥にあった大きな天蓋付きベッドに倒れこんだ。
『久しぶりのベッドだ……！』
『そんなベッドくらいで大げさよ』
『大げさじゃないよ。ずっと隠れて生活してたからベッドで寝るなんてめったになかったし、今日はずっとジンの、イブキの中で座ってたんだから』
ベッドの上でゴロゴロと気持ちよさそうに転がるユティアをしり目に、部屋を見渡してみる。
さっきまでいた大会議室と変わらない広い空間に、天蓋付きのベッド、一〇人くらい横に並べそうな長いソファ。壁の一辺はすべて満載された本棚で敷き詰められ、

天井にはシャンデリアが二つ並んでいた。
ここがガラシアの居住スペースだろうか。
察してはいたが、二人は相当身分の高い存在なようだ。宗教関係の偉い立場か、国家運営の偉い立場かはわからないが。
『それでティア、聞きたいのだけれ、ど』
ガラシアはソファに腰かけてユティアの方を向いた。
しかしそこにはすでに夢の国へ旅立った少女と、それに毛布を掛ける球体しかいなかった。
『寝ちゃったのね。……長旅ご苦労様』
なんとも言えない雰囲気だ。コックピットにいたユティアと二人きりだったときはこんなに緊張しなかったが、少女ではなく女性相手で二年ぶりとなると言葉に詰まる。
さらに言えば、少しではあるが言葉が通じてしまうのもそれに拍車をかけている。

「あの……」
『「こちらにきて」？』
どんな日本語なら通じるか、考えていると声を掛けられた。
呼ばれるまま近くによっていき、ガラシア同様にソファに腰かける。

『まずは、ありがとう。あなたが居てくれなかったらあの子は立ち直れない傷を負っていたか、死んでしまっていたわ』』
助けられたのはこちらの方だ。
『「そうなの？」』
俺は、ずっと意識はあるのに動けない状態だった。
何度助けを求めて叫んでも祈っても誰もどうしてもくれなかった。
死にたくなっても死ねなくて、どうしようもなかった時に少女が、ユティアが来てくれた。

そのあとは、俺がユティアを失いたくなくて、彼女を守るために動いていた。
だから、俺が先に助けられたから助けているんだ。
『「不思議な出会いがあるのね。どんなに苦しい状態がスタートでも、お互いに助け合える関係が築けたのはいいことのはず」』
ああ。これからもユティアを護って往くよ。
でもまだユティアのことは名前しか知らない。どんな事情があるのかもわからない。
彼女のためと殺した人たちは、本当に殺すべきだったのか自信も持てない。
俺が、エッケガルニがどれほど通用するかもわからない。
だから、教えてくれないだろうか。この世界のことを、ユティアのことを。
『「ええ。あの子にはあなたが必要だもの。あなたが頼ってくれるなら応えるわ。何でも聞いて」』

「じゃあ、何よりも少女のユティアのことを知りたい」
いいわよ。でも、日本語なんて使うことなんて滅多にないから、伝わりにくかったら言ってね。
「ああ」
ティアは、ファーグスト帝国の皇女だったの。
「だった？」
ええ。帝国は半年前に滅ぼされたわ。まだティアがいるから完全にではないけれど。
それを相手もわかっているから死に物狂いでティアを探しているの。
「じゃあユティアの敵は話し合いではどうにもできないか」
出来るわけないわ。
話し合いの席に着いたら最後、殺されるか死んだほうがマシな目に合うかの二択よ。
「……わかった」

ティアの敵は、メリュジナ連邦。帝国の北東に最近興った国よ。
戦争を起こした理由は簡単に食糧危機でしょうね。あの辺りはここ二年間、ずっと悪天候が続いていたそうだから。
「そんな理由で、滅ぼすほどの戦争が起こるものなのか……？」
実際に起こったわ。そして、帝国以外には侵攻していないことからも、それで食料問題が解決したんでしょうね。
今いるこの都市は帝国の西に位置する、聖エルグラム教国の首都、ヴァルヘルム。
この世界における一大宗教、地母神教の本山の一つよ。
ファーグスト帝国も国教は、四〇〇年も昔から地母神教だったの。だから皇族と教会は親密な関係だった。
三〇〇年前の枢機卿同士の争いには帝国が仲介して収めてくれたし、帝国で疫病が蔓延した六〇年前には多くの神官やシスターたちが帝国に向かったわ。
それくらいお互いに友好的だったの。

だから、援軍要請には前向きに考えてくれるはずよ。
「援軍要請？」
あ、さっきの話は伝わらなかったんだっけ。
「ああ。俺は日本語しか理解できない。この世界の言語も勉強するつもりだが、今はな」
そう。あなたはやっぱり日本から来たのね。
ちなみに伝えておくと、この世界の言葉は一つに統一されていってるの。地母神教が国教の国はみんな、アイシス語を用いているわ。
「世界レベルで統一とは、そんな大々的なものが可能なのか？」
さあ？　でも二年前に聖ジュラーブ教国の聖女に神託が降りてから、世界中の聖女に同じ神託があったらしいわ。
だから、世界中で動き始めてる。
私にそんな神託が来たことはないけれどね。
「私は」ってじゃああんたは」

うん、この国の聖女よ。称号みたいなものだけどね。
「言ってよかったのか、神託が来てないだなんて」
だめだよ？　枢機卿のおじいちゃんにも隠してるんだから。
日本語で話してるからほかの人にはわからないし、気が緩んじゃったみたい。
「緩んじゃったって……。そうだ、なぜこんなに流暢に日本語が話せるんだ？　一番最初の挨拶の時は片言だったと思うんだが」
簡単に言ってしまえば、魔法の一種よ。
「翻訳することができるとかか？」
そんなに便利な魔法ないわよ。
私が使ってるのは速度を上げる魔法と、読心魔法を掛け合わせた応用。
あなたの頭にある言語を少しづつ取得しているのと、学習速度を上げて自然に話せるようにしているの。
「翻訳より高度なことしてるが」

違うの。翻訳魔法なんて作ろうとしたら翻訳する言語とされる言語の二つをちゃんと理解してからじゃなきゃ作れないわ。
だから日本語が不十分な私にはできない。
この調子であなたとたくさん話してたら、いつかはできるかもしれないけどね。
「それが必要なほど日本から人が来るのか？」
そんなことはないわ。日本人、地球の人が来たのは一四〇年前に聖ベルドール教国が召喚した時が最後だから。今までで二〇人も来てないと思う。
それに召喚された人たちは女神さまの力で言葉が通じるようになってるしね。
「翻訳魔法要る？」
……要るわ。知識の一つとして重要だもの。
「勉強熱心すぎるだろ」
ふふふ。それにもう一つ理由があるわ。
あなたと話すの楽しいの。

「はぁ……？」

他の人たちは、私が聖女だからって敬語だったり何も話してくれなかったりすることが多いのだけど、あなたは自然体で話してくれるし、私もそれで話せるもの。

だから、アイシス語でも喋られるようになって？

懐かしい日本語で話し込んでいると、いつの間にか外は暗くなっていた。
「たくさん話せてよかったわ」
「ああ。俺も助かった」
侍女のイザベラが夕食を知らせに来るまでに、いろいろと情報を得ることができた。
ユティアの背景がわかって、俺の敵が見えてきた。
ユティアがこれからどうしてここへきて、これから何をしようとしているのかも。
本人が寝ている横で、違う人から聞くのは悪い気がするが、言葉がまだ通じないから仕方がない。
ガラシアにこの世界の地理や国家、言語などをもっと教えてもらう約束もしたし、現代地球の技術を覚えている範囲で伝えることも約束した。
やっと、居場所を得られた気がする。

まだ眠っているユティアのもとに残ると部屋を出ていくガラシアを見送り、窓から景色を眺めてみた。
青っぽく光る月、夜でも明るい街。
この世界の月は二つあるなんて知らなかった。
魔法がこんなに人々の生活を支えているなんて知らなかった。
これからも、知らなかったことを知っていくたびに、少女へ感謝をすることだろう。
あそこから連れ出してくれなければ何もわからなかった。
「ありがとう」
『いやっ……』
寝言を呟くユティアへまだ伝わらない感謝の言葉を口にする。
いずれ、ちゃんとこの世界の言葉で伝えよう。
『来ないで』
俺も手伝うことと、護り続けることも目覚めたら伝えよう。

そのために、先にその言葉だけガラシアに教えてもらったのだから。

『来ないで!!』

寝言がひときわ大きくなると同時に、少女が目を覚ました。

肩を震わせて縮こまり、何かに怯えたような様子に思わず駆け寄った。

腕を取り出し、頭に触れる。

聞いた通り、ひどい目にあってきたのだ。安心できる場所だからといって、過去を思い出し悪夢を見ることだってある。

だれか、本当ならガラシアがこの役目をしてくれた方がよかっただろう。

『ユティア』

『……イブキ』

少女が顔をわずかに上げる。

「『大丈夫』」
『……え？』
「『大丈夫』」
でも、俺もユティアを心配する気持ちはガラシアにも負けていない。
「『大丈夫、俺が護るから』」
ついさっき習った言葉。文章として俺が使えるアイシス語はこれだけ。
でも、ユティアの震えは払うことができた。
『イブキ』
少女の手が伸び、球体を抱きしめる。
それを受け止めつつ、俺はまた『大丈夫』と呟きながら撫で続けた。
『起きてる!?』
ユティアが落ち着くころ、部屋の扉を開きつつ慌てた様子のガラシアが帰ってき

た。
　すぐに食べて帰ってくると言っていたのだが、そんなに慌てることがあったのだろうか。
『お従姉さん、起きました』
『よかった。……よく聞いて、連邦軍が来たの』
『え？』
　ガラシアの言葉に、せっかく収まった方の震えが再開する。
　それを見ただけでどんなことが話されてるか、察することができた。
『あなたを探してるって。ローウェたちが時間を稼いでくれてるうちに逃げなさい』
「ガラシア、追っ手か？」
　ユティアの視線がこちらを向く。
「そう。でも、戦おうなんてしないで」
「なぜだ？」

「率いてきたのは帝国の首都を一機で燃やした機兵、私たちが『太陽』と呼んでいる機体なの。あれと戦ってはダメ。ティアを乗せて、遠くへ逃げて！」
『お従姉さん、イブキとなにを？』
『あなたを連れて逃げてって』

逃げる。少女を護ると言ってすぐに逃げ出す。
果たしてそんな奴が、この先どうして信頼されるだろうか。
「ガラシア、すまないが、通訳を頼めるか」
「ええ」
護ると言ったのだ。逃げることも護るための手段の一つだ。
でも、一度たりとも戦わずに逃げるのは違う。
それはただの敵前逃亡。戦う意思の無い者がすることだ。
「俺が、その追っ手を打ち破ろう。そして、君に誓う。決して負けない君の剣に、絶

対に護りぬく君の盾になると」
「イブキ？　私は逃げてって……」
「すまない。だが、もう伝えてあるんだ。『俺が護る』って。だから逃げるんじゃなくて戦うよ」
『イブキ……？』
「……もうっ。負けたら許さない」
「ああ」
「じゃあ、伝えてあげるわ。『　　。　　』」
ガラシアの言葉を聞き終わった少女は、涙を浮かべながらも笑ってくれた。
その笑顔のために、戦おう。
「エッケガルニ、起動」
聖都ヴァルヘルムの一角にある格納庫で、蒼い流線を連想させる三つ目の機兵が独りでに目を光らせた。

やがて膝立ち状態から立ち上がり、移動を始める。
近くの整備兵が慌てて駆け寄ってきているが、踏まれたくはないので触れるほどの距離までは寄ってこない。
外に出るために扉を押し壊し強引に外へ。
押さえるためか教国のジンも三機、動き出したが遅い。スラスターで浮き上がると、都市の中央へと飛翔した。
「その敵はどこにいるんだ？」
「あの街の外壁沿いよ。……でもあなたのジンのところまで戻らないと」
「いや、あいつのほうから来る」
窓のカギを解き、バルコニーにでて空を見上げる。
暗い夜空に浮かぶ青い流線形を思わせる機兵が下りてきていた。
ホバリングでコックピットとバルコニーの高さを同じくらいに調整し、ハッチを開く。

「行ってきます」
『イブキ！　絶対帰ってきてね』
「『大丈夫』、必ず帰ってくる」
定位置に戻ると、ハッチを閉じつつ衣装変更をエッケガルニに設定する。
「K四―〇　エッケガルニ、出撃する」
誰もいないコックピットで、一人宣言する。
前回のように何もわからず戦うわけではない。自分の意志で、戦闘を仕掛ける。
弱気にならないよう、発破をかけた。
垂直に浮き上がる。
少しづつ小さくなっていく二人を尻目にガラシアの指した防壁へと向かった。

エッケガルニが立つ。ヴァルヘルムの白い防壁の外、見渡す限りの草原に。
正面には、二〇メートルを優に超す巨人。
胴体が三つあるかとも思うほどに太い両腕と、全身を包み込む熱い炎。
ユティアが『太陽』と呼んだ理由が分かった。
すべてを燃やし尽くさんとするほどに発熱している。
敵対するすべてを氷塊にするエッケガルニの氷河期と対極の性能を持つ機兵だ。
『帝国の残党の手に特殊兵器群が渡るなど、悲しきことだな』
なにか通信してきているが、意味も分からなければ聞く気もないので無視する。
通信を伝えるべき人も、コックピットには乗っていないから尚更。
『このジンは……。なぜこちらに!?』
ローウェがなにか言っているが意味は分からない。
変わりに背中に収めていた斬刀を取り出す。

『『ローウェ、今エッケガルニがそちらに行ったわ』』
『ガラシア様？』
『『ティアとイブキは戦うことを選んだの』』
雪の切っ先を『太陽』へ向ける。スラスターへと推力を注いでいく。
ユティアが怯え、ガラシアが警戒する機兵だ。全力でいく。
『『連邦軍の皆様へお伝えします。皆様のおっしゃる通り、ファーグスト帝国第二皇女ユティア・リア・ファーグストはこちらで保護しております。
しかし、引き渡しには応じません。あなた方の前に立っている蒼いジンを倒すまで、ユティアの身はあなた方のもとに行くことはありません』』
『つまり、こいつを倒せばいいのですね？』
『出来るのならば』
「斬る！」
背面のスラスター三基が一斉に火を噴く。

三つの眼光が残像となり、赤黒く迸った。
刀身に氷の膜を張った大太刀による刺突。
太陽は動くことはあれど慌てた様子はない。
太陽の装甲に当たる寸前、氷の膜が急速に溶けだした。
即座に腕を引いて距離をとった。
やはり、あの機兵そのものが熱くなっている。
氷がなければ雪は刀として使えなくなっていたかもしれない。
一切の攻撃が熱によって溶け出し、無意味なものになる。
エッケガルニは速度重視の機体だ。そんな防御力の前で打てる手はそう多くない。
肉弾戦ではなく、特殊技能同士で決着がつく。
長期戦にはならない。
どれだけ相手を凍らせられるか、どれだけ相手を燃やせるか。
互いに影響を与える速度と、自身の耐久性の我慢比べだ。

「技能展開」
氷河期を展開しなければ、全てが劣っている。
時限式だが、出し惜しみしているような暇はない。
胸部や肩部、各関節部に散る十のインジェクションポートから、止めどなく白煙が溢れだす。
周囲に、特に太陽の付近へと撒き散らしながらも、雪へとその一部を集中させた。
再び斬りかかる。
一度溶かされた氷膜は、厚く白く雪を覆った。
それでいて切れ味を一切落とさず、切っ先は炎の光を反射し白く煌めく。
大きく振り上げたそれを太陽は、巨大な腕で迎え撃ち互いに弾かれる。
着地と同時に回転し、遠心力を用いて二撃目。
太陽は飛び跳ねそれを躱すと、手を組んで振り下ろす。
エッケガルニはそれを雪で受け止め、周囲には衝撃波が走った。

雪と炎が侵食しあい、氷が解け水となり、炎を消す。炎を消すと同時にそれは水蒸気となって白煙が広がっていく。
上空から打ち込まれたそれを耐えきり、つばぜり合いから抜け出すと雪の氷膜を一新する。
エッケガルニの薙ぎ払いと、太陽のアームハンマーが何度も打ち合う。
ぶつかり合うたびに、氷が解ける水蒸気の音が鳴り響く。
太陽の耐久がどれ程かはわからない。
それでも、終わりが近づいてきているのは判る。
エッケガルニももう一分と持たない。
太陽の左手に、一際強く炎が収束する。
こちらも、もう何度目かわからない氷膜の更新をし、スラスターとインジェクションポートの出力を上げた。
次が最後の一合。

一瞬の静寂。
水蒸気たちの霧が晴れたその瞬間、同時に駆け出した。
狙うは右からの薙ぎ払い。その腕ごと、全て斬る。

今までで最も威力の籠った薙ぎ払いと正拳突きのかち合いは、双方ともに不発だった。
薙ぎ払いは斬ることができず、拳は軌道を変えてエッケガルニの頭部横へ流れた。
しかし、そこには明確な違いが現れていた。
拳の炎はいまだ健在なのにもかかわらず氷膜は、溶けきった。
『勝負あり、だな』
通信とともに左手がエッケガルニの胴体に触れる。
炎が延焼した。エッケガルニの蒼い機体を、赤く黒く燃やしていく。
さらなる追撃をと、右手がコックピットハッチに触れた。

「今！」
その瞬間、雪の先端にだけ氷膜が張られた。
そのまま斬り返す。
両腕がエッケガルニに触れていた太陽はその一撃を防げない。
氷膜が太陽の体温に溶かされながらも、ついにその装甲に雪の切っ先が到達した。
切り込み一メートルほどの、機体の大きさにしてみれば小さな傷。
太陽もされるままではなく、すぐに距離をとった。
しかし、もう手遅れ。
「これで勝負あり、だ」
燃え盛り、外に座席をさらしたコックピットで独り言ちる。
二機の周囲に群がる白煙が、太陽へと殺到した。
大半はまだ熱を保っている太陽に溶かされるが、今付けた傷から白煙が侵入していく。

太陽を内側から凍結させていく。太陽の機能を少しずつ奪っていく。
やがて太陽は体温も保てなくなり、その全てが氷に帰した。

白煙の一部をエッケガルニの消火に充てながら、それを確認した。
この勝負は、俺の勝ちだ。
エッケガルニを一筋の光が照らす。
夜明けだ。
眩しいそちらを見ると、本物の太陽が顔を出していた。

近づいてくる一団の先頭に護りたい少女を見た。
晒しだされたコックピットから、飛び出しその子の場所を目指す。
俺が近づいていくと、少女も駆けだした。

暖かい。
抱き合った少女から暖かさを感じる。
『イブキ、「ありがとう」』
少女の口から意外な言葉が聞けた。
いつの間に知ったんだろう。
出迎えてくれる言葉がそれなんて、胸が張り裂けそうだ。
それに返せる言葉なんて俺は持ち合わせていない。
いえる言葉は機械のように一小節だけ。
でも、それでもきっと少女は、ユティアは笑ってくれる。

改めて言葉にしよう。
決して忘れない、違えない誓いを。

「『大丈夫、俺が護るから』」

氷結の機兵と亡国の皇女

著：小杉　春人
絵：石原　優希

発行日　2022/02/10
発行者　名古屋デザイン＆
テクノロジー専門学校
印刷会社　オンデマンド様